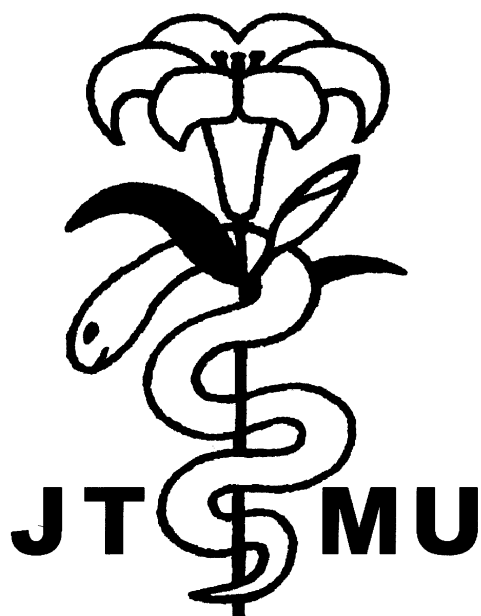


# さと も便り

第 8 2005年11月

日本台 師連合 報部

*<http://www.jtmu.org/>*





# 目 次

1. 小泉啓示録.....	丘 哲治	2
2. 日本植民下台湾の台湾的教育政策.....	東 昌明	4
3. 台湾的政治與兩岸關係的投影.....	東 昌明	10
4. 台湾主權記念会 彭明敏先生特別講演録.....	彭 明敏(講演)	16
5. オリーブの木 ー台湾主權記念会後記.....	王 紹英	22
<b>6. 李登輝氏が懸念する台湾と日本の安全保障</b> ~日本の最大の理解者の声に耳を傾けよ!~	古森義久(日経 BP)	24
8. Should Taiwan be recognized as an independent country? ...	王 苾先	29
9. 尿路結石再発防止のために(食事・生活指導)....	林 昭棟	32
10. 素晴らしき仲間 ーイタリアとサンマリノ共和国....	丘 哲治	34
11. 日本台湾医師連合のあゆみ.....		36
12. 05年第2回日本台湾医師連合理事会議事録.....		44
編後語 .....		46

## 小泉啓示録

丘 哲治

2005年の総選挙を終えて、国内の政界は勝者や敗者の清算が始まり、暫く秋の政局は続くだろう。なぜ自民党がこんなに大勝できたのか、原因は色々あると推測されました。しかし、最大の原因は、政界のしがらみや持たれ合い体質に飽きた国民が、小泉総理の改革の姿勢に共鳴して自民党に票を入れたことにあるでしょう。それが自民党の圧勝をもたらしたわけです。解散直後に、一時マスコミは民主党が自民党の分裂選挙に漁夫の利を得ると予測しましたが、蓋を開けて見ると漁夫の利を得たのは民主党ではなく、利を得たのは自民党であり、特に一部の自民党内で改革の旗を掲げながら、密かに改革を反対した議員でした。小泉さんが首相の座にいる間には、こういった議員は動けないかもしれないが、小泉後はどうなるかまだ油断はできないでしょう。ですから今回自民党が圧勝しても、日本の将来が吉に出るか、そうではないか、長期的に観察して見ないと分からないでしょう。

国外の反応は、欧米では概ね小泉総理の改革姿勢を歓迎していますが、アジアの某大国のマスコミは日本に独裁政権が誕生したと報じ、訳の分らない報道で何か勘違いではないかと失笑を買った。自由な選挙がない世界最大の独裁政権を持つこの国が、新聞で他国の選挙結果を論じて、そして日本が独裁の国になると決め付けることは、やはりこの国らしいところであろう。

ともかく、他国が日本をどう見るかはどうでもいいことでしょう。問題は、日本自身がどうやって自分を変えていくかです。90年代以後、日本の経済はずっと停滞しており、失った十数年のつけの大きさを国民が身に沁みて肌で感じました。しかし、一部の無知な政治家たちが、知らん顔して必死で既得権益を守ろうとしています。こうした改革に後ろ向きの利益誘導型の政治家は小泉改革により落選し、当選しても政権の中枢から追い出されている。小泉総理が国民の選択であるこの追い風に乗っていけるどうか、改革がこのまま突き進むか、停滞か、国民の皆が注目している。郵政民営化の改革が終わっても、次に出てくる物は山ほどあります。国民年金、消費税問題、莫大な財政赤字など問題が山積していて、どれをとっても深刻な状態にある。国民が小泉総理に与えている政権はそう甘くはないだろう、もし自民党が国民との公約を破って、国民の期待を裏切ったら、次の選挙でのしっぺ返しは相当怖いものになるでしょう。

一方、台湾の陳水扁総統は、二期目に突入しましたが、あいかわらずレームダックの総統のまま、野党の妨害で何も出来ません(或いは陳水扁自身がしない?)。この調子で行きますと、あつと言う間に、ただの“台湾出身の総統”の肩書きを持って残る2年の任期を平凡に終わってしまいます。陳水扁総統は小泉総理が国会を解散して、そして総選挙で大勝したことを羨ましく見えますが、羨ましいだけではことの解決や政策の遂行はできません。陳水扁総統は、もっと自分の色を出してもいいのではないかと、国民はずっと期待している。しかし、今のところそれらしい政策が出てきません。小泉総理のように強烈なリーダーシップで台湾を台湾の歩くべき道へ導いて行くなれば、きっと国民の支持は得られる筈です。再選する心配のない陳水扁総統は、何か強力な政策を打ち出さない限り、台湾の選挙民はきっと、彼と与党を見切って支持しなくなるでしょう。

成熟した民主主義の国では、国民は政局を見るのではなく、国民が注目しているのは政策及

び実行力です。小泉総理が今回の選挙に勝っても、改革の道のりはまだ長く、試練も続くだろう。日本は台湾のように国家存亡の危機には瀕していませんが、日本の国民は改革を選びました。台湾の国民は“現状維持”という言葉が好きなのだが、国家存亡の危機に直面している台湾は、そんな“現状維持”の余裕はありません。今回の日本の総選挙の結果は、台湾の国民・与野党・政府要人に何かを暗示したか、そして何かを見習うべきかを示したのか、我々は関心を持って見守りましょう。

## 日本植民下台湾的教育政策 (後藤新平・持地六三郎的教育構想)

東 昌明

民族の外へ、文明の中へ

明治 31 年,伊沢修二非職,經半年後,後藤新平跟隨兒玉源太郎總督就任民政長官。日清戰爭後,樺山、桂、以及乃木三代總督,以台灣為植民地在治安、行政、經濟等經營上僅屬過渡期,正式構築確立統治體制乃由後藤民政長官開始,8年間(明治 39 年止)奠定了台灣近代化的根基。

後藤新平基本上是以“生物學原則”為基點,尊重民俗舊慣習來統治台灣,否定日本憲法適用於台灣,自稱模倣英式植民政策,但是依中村哲先生的論證,既非英式、亦非法式,乃後藤流獨自創作的模式。改善治安問題、整備社會基盤、在財政上使台灣得以自立,執掌學務者乃是五代目的學務課長持地六三郎(明治 36 年~43 年)。(伊沢修二、兒玉喜八、木村匡、松岡辨為前四任)。在表層,伊沢、後藤、持地都標榜“同化主義”,但是內容却大不相同,接下來就要進入本文。

### (一).新統治方針的開始與頓挫

#### (1)“日本の外へ”の台灣統治

伊沢修二是教育界出身、留美熱狂的國家主義者,後藤新平則是醫界出身、冷徹合理主義的持主,明治 28 年 11 月衛生局在任中,受芳川內相囑託,調查鴉片對台灣社會各方面的影響,向台灣事務局總裁伊藤博文提出“台灣鴉片(阿片)制度ニ関スル意見”,主張阿片漸禁論受重視,受命為台灣總督府衛生顧問。明治 31 年兒玉源太郎任總督時,被任命為三代目的民政長官,博得“科學的政治家”美名。

赴任當初,後藤長官即公言:要拓植台灣,首要急務乃是必須改造內閣、議員、以及對台灣實力者的經營植民台灣的思考方式。大正三年(1914 年)在同志社大學講演時,提出“國家衛生原理”(自身的世界觀、人生觀),明言此乃日本植民政策的根本原理,後藤長官本身是醫者,深知生物學現象,融合英社會學者 Herbert Spencer“社會進化有機體說”以及ドイツ思想家 Lorenz Von Stein 的“國家思想、衛生思想”理論,倡言:生存於自然界,微弱的人類,為追求享有“生理上円滿”的理念(此乃人類固有天性),導引出社會、國家的形成,優勝劣敗、適者生存的自然法則,在人間社會也是適用的。因此 8 年又 8 個月在任期間,行政基盤乃依人類進化的原理來推行。以比目魚的眼與鯛的眼、來比喻當時台灣人與日本人進化階段的差異點,漫然導入文明,有違進化原則,應遵尋舊慣配合社會進化原則循序而進。因此可以結論說後藤的台灣統治理論背後深受“社會進化論”影響。

後藤反對依國體論來統治台灣,自然否定了日本憲法適用於台灣,主張“特別統治主義”。大幅革新統治政策,明治 31 年 4 月合併“台灣新報”與“台灣日報”為“台灣日日新報”,5 月為削減統治コスト以及欲排除不同統治理念的中樞機構實力者陸海軍關係官吏,大量裁員,廢止三段警備,將治安維持工作託付警察體系,對土匪(包含抗日志士)改彈壓為招降,7 月發布台灣保甲條令,採連座制,在新的治安維持方策下,大量逮捕殺戮台灣住民,類此諸強硬施策,深受各界批評,首先殉難者是學友會,下述即將檢討其內容。

#### (2)後藤の“暴政”を批判する“國體論”

學友會是一政治團體,以松本龜太郎(北投松清園主人)及滝野種孝(元判官)為總代,學員包括基隆、七里、景美街、水邊脚等各地弁務署長,職責乃在協助陸軍通訊,與軍部有深厚關係,是國體論的絕對擁護者,對於後藤長官一連串施政持異議、大量裁撤軍部關係,官吏也為軍部所不滿,因此鼓動學友會造訪兒玉總督(明治 31 年 12 月 13 日),對於台灣統治問題,提出“台灣經營策”(合計 10 項目,以國體論為基礎)通告總督,將具狀上參內務大臣板垣退助,表明不當統治施策、乖離國體論違背天皇聖德等,學友會メンバー批評兒玉、後藤主導下台灣的統治是“暴治”,是“チャンポン政治”,以優勝劣敗、弱肉強食、社會進化論強行壓抑台灣人民族,製造人種競爭危機,主張應廢除保甲制度,刑法僅設單行法民法,商法除了舊規慣例外應比照內地法制,

司法官衙以及職員應直屬司法省管轄，總督府僅執監督權，對於新領土的新附民應以一視同仁精神，推進文明進步、平等化、同一化，早日大和民族化，內容實際上與伊沢修二的統治觀相符合。12月29日兒玉總督將面談經緯以及“台灣經營策”副本轉交給後藤，指示“充分御注意”。當然在學友會的批判中，參雜軍部的政治鬭爭是不可否認，但是基本上，國體論是主張新領土、新附民最終應納入“日本の中へ”，而後藤的台灣統治論却是“日本の外へ”，完全背道而馳，因此如何對處逸脫國體的解說，將顯現出兒玉、後藤コンビ台灣統治理念的核心所在。

#### 社會進化論與國體論：

社會進化論的基本論理，人類與生物的誕生並非源由神或上帝所創造、設計，係以巧妙的構造，無數次試行錯誤，投入適其生息的環境中，漸次演化進化而成，因此根本上否定神的存在，也否定キリスト教的自然觀，以自然科學的觀點立腳，沒有神秘、迷信的要素存在，當然與神祇政治、神代秩序、“神國”的日本國家觀有其不相容、相克的部分。以進化論為基點要來解釋國體論，對於大和民族的祖先天照大神（自古由來的觀念）必然無法成立，君民同祖也違背日本建國原理。此外兩者之間也存在着很大的障礙——國體的一視同仁政治原理與生存競爭的進化法則。國體的理念，只要是日本人，一視同仁是處於優位，即使是弱者、劣者也必須均等承受皇德恩澤被覆，而社會進化論則提示人間社會的生存法則，優勝劣敗、適者生存。

對於學友會的質疑攻勢，在文獻上未能發現後藤長官直接回答文言，但是由收錄於“後藤新平文書”內的“奉る欽仰並に伝へ承つたる逸話”文稿中可查知些許脈絡（後藤長官受講談社的委託撰寫有關明治天皇的逸話的文稿，大約是大正12年成稿，時任官滿鉄總裁，通信大臣頃，述懷謁拜明治天皇情景。）如下：

“明治天皇の大御心はその御公明であらせられることは、月の如く、その御寛大であらせられることは海洋の如くなるに感泣した。聖恩は平等にして且つ普遍的に光被及ばざるなきこと知り、申すも畏けれども、御生れながらして、神に近い否な神の如き、御仁徳をそなへたまひ、人類の偏愛を超越した所が在らせられるやうに拝し奉るのである”。

社會進化論的信奉者，應該是否定神的存在，但是對於近乎神的地位的明治天皇，普遍的、平等的仁德恩澤超越人類的偏愛，一視同仁普照群眾，令後藤也不得不承認聖恩一視同仁的優越性，不過對於“平等”與“差別”，還有別種解說：

“而も有らゆることに付て非常に平等で在らせらる裡に自らなる差別を能く御覽遊ばされる、されは實に人君として自然の御聖徳であつたらうかと伺される。右の如き微々たる自分に関係したお話を承ってからは一層シミジミ自分はた様に考へることがある、その故如何であるかと云ふに、世の中に指紋と云ふものがあるが、何十何億何兆の人の指紋を集めても同じものはない、之を見れば、造物者が平等に人間を造つても各個差別のあることが分かる、往々平等と云ふことについて誤解をして居る者があるが、平等と差別の間に彼此寛嚴の宜しきを得てこそ天下の統制はその全きを期することが出来るのである。明治天皇は御聖徳を自然に御備へ遊ばされて居ることを恐察し奉るに餘りあること、此事実から觀て一層自分は深く考へるのである。”

由上述文言，可以很清楚查知其真意，造物者一見似乎是平等，可是實際上，在同一條件下孕育出來的人間有其先天能力的差別，因此對人間無條件一律給予平等、在現實上是不可能的，這是自然現象，無從解說，也因此差別的政策施行，並無損聖德的威光，也不違背天皇恩德，而且由自然界自然的現象來考慮，差別乃是自然的平等，亦即以“差別即平等”進化論的觀點來應對一視同仁的質疑，來解明乖離國體論，也為自己差別統治台灣統治構想立論。彼此間的矛盾、不

相容,後藤長官並非無自覺、無意識,国体問題始終是其心結,因此往後有關於台灣統治的言論文詞,經常是曖昧不明、難解,例如明治 33 年提出的“台灣經營上旧慣制度調査ニ関スル意見”文中:

“此の領土に対する政策と云ふものは、時と場所とに依りて同じからぬのである。決して是れは何れの国が成功して居るが故に之に模倣すべしと云ふが如き単純なことは出来ないものである、本国の国体にも依るし、其の新領土の事情にも依らなければならぬ。”模擬両可,「国体「一視同仁」論調散見於文中。

## (二)後藤新平的国語教育構想(本音と建前)

### (1) 揚言“一視同仁”的揚文会訓示:

揚文会:明治 33 年由兒玉總督、後藤長官創会,招集台灣全島文人知識人(清科舉“生員”以上“進士”士紳)齊集台北,為文、咏詩興學風,目的在要求本土知識人給予日本統治協助,利用知識人的影響力,來促進台灣島民子弟入學公學校的懷柔政策施策国体。3月 15 日發足,以淡水為中心,招待受招待者見學參觀總督府各處施設,並舉行演講會,由後藤長官主講,以近代日本文明的勃興與支那的沒落、其分歧點乃在於近代教育實施的有無,由此剖析台灣傳統教育施設(書房)與日本新式教育(公學校)的優劣相違,提示台灣人入學公學校的必要性,斷言書房、耽於清科舉詞章訓詁末枝非真實才學,有礙文明吸收發展。捨漢文、取日本語,乃是遂行近代教育的捷徑,獎勵勸進揚文會出席知識人後進入學公學校。依生物學原則,為避免新附民言語世界急激變化,一時溫存漢文,採行混合主義,在此時點同意認同伊沢先生觀點,將公學校教育與国体、一視同仁相連接,試觀其演說詞:

“本島の我が大日本帝国の版図に帰せし以來、諸君は我輩と均しく帝国の臣民に誼に於て實に兄弟の關係あり、畏くも、今上天皇陛下は一視同仁、斯の新附の民を視ること猶ほ赤子の如く我等と均しく本島人民を愛育せられるの道に就て夙夜転念し給ふ。(中略)我国の本島人民を教育し之をして同化せしめんとするは、彼の他邦異種族を征服し殖民地を拡大ならしめ自己を利せんと欲するの政策とは、我国家本旨に於て既に霄壤の差あることは、惟ふに己に諸君の了知せらるる所ならん。抑我国教育の淵源に溯らんと欲せば、須らく先づ歴史を知るを要す、我教育は国体と終始一貫して相離れず、而して我国体の字内に冠たるは世界各国の欽慕して措かざる所たり、實に我國民は天地開闢の当初より皇統連綿、万世一系の皇室を戴き、君臣は父子の如く、国家は天壤と與に窮りあることなし。神代の事蹟は姑らく叙述せず。(以下略)

由上文大略可知後藤長官對於台灣植民的想法,基本上與西歐不同,不止於領土的擴展、利益的榨取,還欲以近代化教育(包含国体論精神教育勅語)流布皇統威光,国体尊嚴的優越性,一見似乎與伊沢的言說類似實際上不然,由明治 36 年 11 月開催的第一回學事諮問會意見書可明瞭,明治 36 年,後藤長官招集公學校校長約 60 名召開第一回學事諮問會,出席者對於後藤長官前後言調矛盾、語意不明,相當不滿,在揚文會上的理念表明一視同仁、普及公學校國語教育,但是在會議質疑問答中,却又說明:對於台灣教育的方針乃在“研究中”、“無方針主義”,應隨時、地的變化而變化非不易,以牽制既存的國語教授方針,在說詞中經常提出フィリピン等其他殖民地支配例,點出過度文明教育實施易促成其民族意識覺醒、造成反亂獨立運動政治面的問題,如:

“教育ハ一日モ忽諸ニ附法ルベカラズ、然レドモ漫ニ文明流ヲ注入シ權利義務ノ論ニ走ルノ風ヲ養成シ、新附ノ人民ヲシテ不測ノ弊害ニ陥ル事ナカラシメンヲ期セザルベカラズ、故ニ教育ノ方針ヲ定ムルニハ頗ル考究ヲ要セザルベカラズ、教育素ヨリ必要ナレドモ、其ノ方針並ニ程度ハ



目下考究中ニシテ寧口未定ト云フノ外ナシ、諸君ト共ニ今暫ク熟慮ヲ要スルノ問題トセン。”此外,对于新附民日本人化的問題,亦即“民族への同化”的理念想法抱持疑問的態度,由下述文言可資佐証。

“国語ヲ習ハシメテモ、何程ノ時間ニ如何ノ程度マデ變化セシムルコトヲ得ルカト云フコトハ、未ダ容易ニ解決サレザル問題デアツテ、先ツ二代三代デ變化シテ行クコトハ六ヶシイコトデアル。”

原本廢止漢文、徹底国語教育施策、目的乃在同化台湾住民日本人化,後藤長官对此抱持疑念,他認為台湾住民乃未教化支那人種的未裔,並非具備先天伝習如同日本人優良素質,因此施以国体論、教育勅語,以德育、智育、一視同仁如同内地日本人式同化教育,習得忠君愛国日本精神是不可能實現,為了植民統治上便利,教化是必要,但是係以医学觀點來感化而非“大和魂”,因此可以肯定作下述結論:

後藤長官的教育構想,乃是為了便利植民統治,以此為中心而研發出適時適地的政策,並無真正的教育方針,德育、智育、一視同仁的說詞,只是為了唐塞国体論者的質疑。

## (2) 反对公学校的擴張以及教育内容的改善

明治31年後藤就任民政長官當時,主掌教育者乃第二任学務部学務部長兒玉喜八,伊沢先生非職後,学務官僚間對統治台湾的教育構想仍然伝習伊沢先生的理念“日本の中へ”、“民族の中へ”,因此兒玉喜八提出的“学務部創設以降事業ノ概略”計畫案中,由明治31~34年度,对于台湾全島53万世代263万人口,学齡兒童12万6千名,一校平均120名計算,共須254校,而當時僅74校,必須三倍擴張,對當時總督府的財政是相当大的压力,因此負擔可能的地域才准予設立的施策、亦即公学校普及計畫的否定乃後藤的佳作,(可以理解,如果不是一視同仁、平等主義教育構想為背景,不可能有此計畫問世。)投入膨大的預算,來教育、教化支那人種未裔的台湾住民,期待習得日本人習性精神進而日本人化,對後藤而言,太不可思議,也沒有意義,主要徵結在台湾住民是支那人種、不是日本人,也不可能同化為日本人,也沒有必要,因此實際上後藤對台湾教育的構想,乃以實業教育為中心,屬於低度的文明教育,反对公学校擴展普及化,也反对公学校教材内容向上,此由明治36年8月提出的“商業的帝國主義實行の三要務”文中可查知。

“学理の研究過度に走りて実地の応用に重きを置かず、此の如くにして学校教育の寧ろ実用に益を認めざるを得ず。帝国の実情は、決して悠々自適、徒らに長日月を費やして、学理の研究にのみ耽る如き、実用に遠き学風を容認するの余裕を有せず。”

至此可以完全理解,後藤長官對於近代教育台湾的導入完全是為了植民地經營上、經濟利益獲得一種手段,在揚文會上的訓示演說,雖然提出国体、同化、一視同仁等用語,但是對於忠君愛国的精神、国民性格的養成、民族への同化三位一体上田万年的国語觀則完全逸脫,因此可以終結說,後藤的台湾統治構想乃是將台湾導向“日本の外へ”。

## (三) 新たな「同化」論理の登場

否定伊沢先生的教育構想,對於台湾的統治想要脫離国体論的後藤長官,在言詞論說上並不顧忌“同化”字詞使用,例如揚文會第一回学事諮問会上有如此言論:

“唯国語普及ヲ以テ、性情ノ異ナル人民ヲ同化スルト云フコトハ頗ル六ヶシイコトナレドモ、当台湾ノ如キハ、将来之ヲ同化シテ、我ガ后ノ民タラシメ、永ク其恩沢ニ浴セシムルコトハ、何人モ異議ナカルベシ。”並不反对同化政策施行於台湾,但是我們此外再截錄其他場合的說詞:

“同化ト云ヘバ、意義一定範圍分明方法不動ノ様ニ心得居ル人モアルケレドモ、同化ニハ色々ノ種類ガアル、之ニ反シテ抑圧主義杯イフモノモ同様ニ、一定ノ如ク解スル人モアルケレドモ、

同化ト云ヒ、畢竟著述者ノ勝手ニツケタル名称ニ外ナラヌノデアアル”。可知兩者之間同化的內實與目標是互不相同。在明治 38 年，後藤長官同化的メカニズム明朗化。

### (1) “一視同仁”與植民地統治、強制融合的同化觀

明治 38 年 2 月 17 日，帝國議會衆議院內討論“大三法”延長時效議案，花井卓藏議員質疑後藤統治台灣政策非“同化政策”，乃是“植民地”政策，違背就任時同化理念演說，對於“植民”與“同化”的弁解，後藤長官陷入苦境。試觀下述弁詞：

“而シテ同化主義ト云フコトヲ明言シタコトハ無論ナイ、皇化ニ浴セシムルヤウニ他日內地ト一樣ニシヤウト云フコトガ、直千ニ同化主義トナリト云フ如キハ、或ハ其一部分ハ同一デアリマセウガ、一部分ハ世ニ言フ同化主義ト異ツテ居ルノデス、故ニ之ヲ以テ同化主義ニ反對シタル殖民政策ト看做スト云フコトニ抵触シタリト云フコトハ少シ議論ガ違フカト思ヒマス。”

亦即，後藤的“同化”、肯定約束“他日”將撤廢植民象徵的“六三法”、實現一視同仁如同內地，只是“他日”必須視台灣住民民度、文明水準達至日本人同等時點，才是“他日”的期日，含糊其辭，蒙混拉延，對於台灣民度的問題，時內務大臣原敬在明治 39 年 3 月 22 日第 21 回帝國議會上質詰後藤，指出彼時台灣財政等各方面與領有當初，顯然大不相同，民度並無偏低落後現象，撤廢“六三法”實行一視同仁同化已是時日，但是後藤反駁，台灣的進步並非由於住民民度的上揚與文明的進步，乃係日本官僚努力經營的結果，由此可知，後藤的同化論，乃是ル・ボン(Gustave. Le Bon)反同化思想的翻版，人種、人類有其遺傳上的特性，而且優劣分明，是後天無法改變的，因此反映在社會制度、習俗、文化上各有其特性，並非平等、同質，無法以教育來提昇，弱者、劣者必須依社會進化原則予以淘汰，否則必導致同化主義失敗的結果。台灣人與日本人的差異，基本上即有優越與劣等、進步與未開，這是無法改變的事實，施以教育同化也有其限度，因此實際上是否定同化，只是為了逃避國體論者的批評與攻擊，以獨特的同化概念“同化即差別”(小熊英二“差別即平等”)作為統治上的理論基礎。

### (2) 封閉平等化施策

伊沢修二在“台灣的教育”文中提到，有關台灣人的頭腦、智德的素質、雅量、以及向學心、對於教育的熱心、認識並不垂於日本人，只是在近代化上落後了近 30 年，後藤新平的想法則完全不同，向學心不足、民度低俗、人種頭腦無法與日本人相比擬近於蕃界，因此在政策面主張低下同化內容，減緩同化推進，儘可能長期化維持差別統治，因此一視同仁實現的“他日”是無期限的將來，以社會進化論的觀點來看台灣人日本人化是不可能實現的，雖然新附民誠服於台灣總督府為日本臣民也不應該賦與同等的權利。

後藤在第一回學事諮問會上“本島人ハ讀書ヲ好ムト云フ人モアルガ、決シテ左様デナイ。唯冠婚葬祭ナドニ際シ、床ノ間ヲ背ニシテ座ラセテ貫ヒタイトカ、所謂讀書人ナルモノハ、元來生レガ違フカノ様ニ人ヨリ尊敬サレシメガ為ニ讀書スルノデアアル。”否定台灣住民的讀書觀，不具現近代為學態度，如果積極施文明教育，將導致治安上的問題，以此來牽制教育普及的主張，此外又明言台灣人乃“變革スルコトヲ好ム”人種，提醒總督認清，以採相應對策。

依差別統治來遲緩台灣人民度以及文明的進展，只要台灣住民不拒絕同化教育，公學校的就學率必然會上昇，文明化也必然到來，積極受容同化教育，一視同仁具現化的時期能短縮，平等化的對象也次第擴展，平等化的實現意即植民體制的崩壞，但是實際上台灣人對於植民地統治的抵抗，並不一定就是在拒否同化教育的一點上。依後藤的論理，我們作出如此推演模式。

積極受容同化教育⇒文明同化的進展⇒撤廢差別統治⇒植民體制崩壞。

“同化即差別”施策的統治構想、統治構造上的陷穽，後藤長官應該十分清楚。ドイツ人医者，將日本近代化的行進評為“死的跳躍”（トク・ベルツの日記、1943年），西歐歷經600年才完成的文明改革，日本僅以半世紀短時間即超越西歐，但是後藤基本上否定台灣人種的優越性，他方面為了植民上的利益，在台灣採行低度文明、漸進的同化政策，因此在結論上我們可以說後藤新平的教育構想、國語教育的位置只是在保持植民統治與國體論的平衡關係，有關同化的發想、思考經路、目的、內容，與伊沢さん等完全不同。此新的同化統治思想在教育現場上由持地六三郎學務課長具體化顯像。

## 經濟焦點下台灣的政治與兩岸關係的投影

東 昌明

前言：

日益困難複雜化的台中之關係、政治的對立、險峻、一方急欲將台灣置入其控制範圍內由此自由進出太平洋、印度洋、遂其不可能實現的海洋霸權帝國夢。一方則安定著實地邁向自由民主大道。但是在經濟資本上兩方依賴日深、相依並存、加上美日中彼此在政治、經濟相互不同戰略

利益的交割、更形撲朔迷離、往後台灣與兩岸關係的歸趨、深信不僅國人關心、也是國際人士注目焦點、因此本文將藉經濟學者的觀點、以其經濟人的立場、視野來解讀台灣的政治與兩岸關係的歸結、事實誤認、不適疏漏處、勢所難免、敬請海涵。

本文：

以兩岸關係為基點、來探討台灣的政治、經濟情勢、大抵上有三個不同的角度與視點可以Approach、一是台灣自身國內問題、二是中國問題、三是日、美、國際性戰略的問題、彼此間盤根交錯、非常複雜、無法單純以一國的立場或利益來說明解決。

政治的對立化、經濟的緊密化是目前兩岸的寫照、一般而言、政治與經濟是相輔相成、相依並存、一般論是無法說明目前兩岸關係、也無法透視內在本質、必須由政治對立中緊密經濟關係的關鍵點去突破、同時由政治、經濟兩方面去探求、才能窺其堂奧。例如1958年8月23日突然爆發的金門砲戰、首先一日間4萬餘砲彈攻擊金門島、旋即隔日戰進而停戰、當事者之間事前並無任何協議、但是開戰至停戰彼此間呼吸節奏的調和度、令人難以相信。在戰爭史上以此

經緯推移戰事、至今尚無專家學者能提出令人滿意的解說。如因今日的兩岸關係不熟悉台灣史與中國史的圈外人、是無法全盤理解。過去國民黨與中國共產黨有 3 次國共合作經驗、現今執政民進黨當然沒有這種經歷、在台灣營商失敗經營者為了逃避司法制裁、偷渡中國、反之台灣也引進中國廉工、彼此藉由矛盾相互依存關係中、各階層汲取各自利益、相信往後兩岸關係、在不影響美、日國際戰略與國益的大原則下、雙方執政當事者、將以追求本國最大利益為目標、持續此政治遊戲。以グローバル的視點來 Approach 兩岸關係、可以說現在定式的桎梏內存在幾層重層構造、重層間存在着不安定的均衡銜接點、有此銜接點的存在、兩岸經、貿關係得以發展、但是往後中國一方持續膨脹經濟力、將影響政治力均衡銜接點、導致兩岸生變。

在經濟學者的視界內、此重層構造的定式桎梏有三種基本樣式、分別論述如下。

(1) 第一種樣式、即由上述政、經乖離關係與美、中國國際政治關係所構成。

2003 年 12 月 20 日中國總理溫家寶訪美、重申 1972 年ニクソンの台灣政策五原則。

1. 中國只有一個(一中原則)、排除台灣未定論。
2. 不支持台灣獨立運動。
3. 美將藉其影響力阻止日本勢力進出台灣。
4. 台灣問題須以和平方式解決。
5. 美中國交正常化。

(錄自海峽評論 2004 年 1 月号)

2004 年 1 月 9 日中國人民日報海外版有下述記事報導：

美國元大總統國家安全保障補佐官 Z、K、ブレジスキー訪中、インタビュー中の談話「有關台灣問題、中國堅持的一中原則、為國際社會所認知、國連安全理事會不支持兩方當事者、其中一方擅自改變現狀、如有必要、由國連正式發表聲名亦可」中國會接受此建議？當然不會、以中國的立場而言、如果接受、實質上將造成國連介入台灣問題、然而實際上、美方最近曾公言、如有必要、台灣問題將提付國連安保理事會議論・商業週刊、2004 年 12 月 8 日号石齊平的石頭評論：

有關台灣立法院國民投票法案(公投法)最後議決的評論文中有此之言[藍取實利、綠得大勢、紅失中盤]紅代表中國共產黨、藍當初是反對公投法、民意潮流如洩洪、只得藉人頭修正條款通過烏龍公投法、因此是取得實利。綠營則志在公投法制化、乃得大勢民意。中國共產黨為牽制公投法法制化、強引日、美介入、促使台灣民意更加疎遠、有如圍碁勝負中失去中盤。(2003 年 11 月 27 日公投法通過)由上述文書可知、政治環境隨時在改變、新的均衡銜接點也不斷的在破壞、重建的模式中進行、1972 年的一中原則、實質上已搖擺崩潰、無法立足、乃有反分裂國家法的誕生。

(2) 經濟學的桎梏(第二種樣式)

在經濟學上能被認定擁有經濟主體的地域或國家、必須具備二項基本條件、自國通貨以及自主關稅制度。有自國通貨、自國的為替市場與自國的為替政策才能成立。一方、如果自國的自主關稅制度不確立、自國通商政策無法營運開展、兩岸關係在經濟學上得以成立、也是因為具備上述二項條件。在國際社會上、自國通貨須接受 IMF 約束管轄、自主關稅也必須接受 WTO (GATT) 監督。以香港為例來說明、香港行政特別區政府所以能實行一國兩制、乃因香港ドル(自國通貨)以及香港關稅制度在歸還中國後、持續受中英協定保障、而中英香港返還協定又受

国連託管、至於自主関税、香港本身就是 IMF、WTO のメンバー。接着来看台湾的情形、1949 年 GATT(WTO) 発足時台湾已是オブザーバー身分、只是不知原委、1950 年代旋即退出(蔣介石政權的失策)、如果當時没有退出、如同香港、必然成為メンバー国、也不会有 2001 年 12 月加盟時的折騰。台湾新台幣(自国通貨)在 1940 年代前半、産業構造已能自立、因此戰後得以發行新台幣、與中国切離關係、建立自国經濟通貨单位。

### (3) 台湾經濟的基礎力(土着勢力)–第三種樣式

日本殖民統治前(1895 年之前)、台湾已向世界各地輸出砂糖、茶、樟腦、石炭、金等商品經濟相当發達、在通貨面上(ローカルカレンシー)多種類流通、進入日本統治初期(1899 年)台湾銀行成立、發行台湾銀行券、但是流通不良、民間不願採用、促使總督府採強權措置、拳凡與殖民政府借貸關係、公共事業、農民貸付事業、一律使用銀行券、經 7、8 年間漸次滲入定着於台湾農村社会、1904 年 6 月導入金本位制、實際上比日本本土還早。1945 年日本敗戰、蔣政權侵

台湾、並非不想導入中国大陆通貨制度、乃因匆促來台、事前準備不足、以及侵台後、東北戰事吃緊、事變急變、未能全般企画經營台湾、急將就通行大陸幣紙券、民間拒絕接受、結果台湾行政長官署、唯有將接收的日系台湾銀行發行的台湾通貨改換朱印、原般流通、這就是戰後台湾ローカルカレンシー的起点、也就是我們所通稱的旧台幣。

一時應急措施而發行的台湾銀行券、隨着行政新政府無計畫的膨脹投資支出、增大發行殘高累積造成 inflation(通貨膨脹)、為改善 inflation denomination 便無法避免(通貨膨脹時貨幣數額過大、只有訂貨幣新单位以換算、實質上即是貨幣单位的貶值)、由於政權無能、罔顧民生、經二次 denomination 才除去爛帳、民困潦倒、無以為生、此即台湾旧台幣→新台幣→新新台幣(目前使用幣制)的源由。兩岸貨幣不得統一、使台湾經濟能脫離中国 inflation 的影響、雖經二度 denomination、但是台湾元能定着為台湾独自の国民經濟通貨、乃冥冥中注定天祐台湾的佐証。

1940 年代对台湾的經濟而言、是一個分水嶺、非常重要的年代、前半正值日本殖民統治末期、太平洋戰爭激烈化、台湾經濟與日本本土經濟上的關係因海上運輸困難化、生産体制漸移行自体化、貿易漸次縮減、而踏上自立的軌道。在日本殖民期間、大力發展近代砂糖與蓬萊米稻耕技術、1919 年設立台湾電力株式会社、1920 年建立日月潭水力發電所、1935 年完成、最大供電量 10 万キロワット、1938 年以台湾為南進基地、大興軍需産業、因此在 40 年代前半、台湾的産業構造已略具雛型、台湾的經濟已能自立、有此經濟条件為基盤、終戰後新台幣的發行、台湾的通貨才能成立。1949 年 3 月蔣介石在台北復職、1950 年 6 月朝鮮戰爭勃發、美軍第七艦隊巡防台湾海峡、宣佈台湾海峡中立化、自然台湾的經濟與安保全面納入美方ネットワーク、因此 1940 年代 10 年間貫穿 2 個時期、在研究兩岸關係與台湾的政治經濟應該是非常重要的關鍵時期、然而實際上能將此時期置入研究視野内、除了 照彦教授(1936 年雲林県、1959 年台大商学系卒、1969 年東大經濟学博士、2000 年 4 月国学院經濟学部教授、日本帝国主義下の台湾著者)以外、找不出第二人。

其次是関税制度、較模糊、不如通貨制度、終戰前後、台湾民生物質尚属富裕、中国大陆則顯然貧乏不足、インフレーション深刻、砂糖與米是台湾當時主要輸出商品、日系製糖会社、五穀米糧戰後完全由国民政府接接管轄、商品的輸出事務、完全掌握在国民政府控制下、由国民政府指定国營銀行為貿易為替銀行、(為替管理)原則上為替與貿易是在国民政府直接管轄下進行、関税制度自然形成、只是加入不足一年隨即退出 GATT(WTO)組織、令人不解。

基本上已具備上述二項基礎条件、但是如何確保以及維持、在經濟学上是比具備更形重要、

能長久確保與維持自國通貨、自主關稅制度、才能確立為經濟自主國家。確保與維持的問題、簡單來說即是貿易收支的問題、通貨欲安定、貿易須黑字、反之通貨必不安定、終戰後至 1965 年台灣因為有美援的關係打潰大部貿易赤字、台灣通貨得以維持安定、由於已預知 1965 年美援將停止、1960 年代起、國民政府便提出“外資導入、輸出指向”經濟政策以應變、設立高雄輸出加工區促使貿易轉為黑字、1974、1975 年第一次石油ショック、國際經濟衰退、全球不景氣、台灣也受波及、此外、至今持續定著於黑字。貿易收支得以維持黑字、通貨、經濟得以安定、主要乃託多項國際商品順調生產之福、(戰前的砂糖、米、茶、バナナ等、戰後的アスパラガス、フラワ、筍、果物等)多品目的農產品以及一次產品加工農業政策的成功、又是託福於早期土著地主制經濟勢力的存在。早期農村社會商品經濟的發達、在國際市場占有先機、戰後農地改革、土著經濟勢力轉移至中小企業、經濟資本仍然存在、因此貿易收支得以持續黑字、基本上是有上述因素存在。韓國則不同、農業國際商品品目稀少、除了米以及キムチ外、無其他特殊商品、經濟、貿易收支長期處於赤字、インフレーション深刻、數次 denomination、至今通貨ウォン仍然不安定。欲了解台灣的經濟結構、由台灣經濟自立過程中、土著經濟勢力是如何的演變、去觀察理解是最便捷的方法、大略可以分成五個階段來說明：

(1) 基礎工事期(1945—1949 年)相當於蔣介石政權時期。

脫離日本殖民政治納入蔣政權國民政府下初期、個別通貨制度以及關稅制度導入、國共戰禍、國民政府專制、促成台灣土著經濟勢力與外來(中國)勢力分斷、國民經濟形成時期。

(2) 輸入代替期(1950—1972 年)

輸入代替、在政策上而言即是設定高保護關稅率、制限輸入、目的在保護國內市場、簡單來說、就是為了保護國內國營產業、貿易收支當然是赤字、但是因為有美援的支撐、使得輸入代替政策得以順利推展。時值蔣介石政權後期、土著地主經濟勢力因農地改革而衰退、農業商品經濟也漸次衰退、資本漸次轉移至中小企業、1965 年美援停止後、輸入代替即廢止、改行導入外資、輸出指向經濟政策、並設立開放高雄輸出加工區。

(3) 輸出指向期(1972—1987 年)

美援的停止、土著地主勢力資產的轉型、迫使經濟施策指向輸出、蓄積的資產利用輸出優遇策(關稅退還制)轉向國外市場、外資系以及土著勢力中小企業在此時期約 輸出金額的 70%、由此在野黨勢力漸次成長、削弱國民黨在政治上的開獨獨裁。

1985 年、發生二大政、經事件、促使蔣經國開獨獨裁體制崩潰。一是台北市第十合作信用會社超貸事件導致經濟破綻、一江南暗殺事件、信用合作金庫一般是設定比銀行略高金利、以吸取預金、當時的十信、吸取不少高級官僚及退職軍人預金、是同行業的佼佼者、因官商勾結、無担保、無抵押、超貸、冒貸、造成呆帳、以稅金國庫填補、大損國民黨顏面。

江南事件：江南是筆名、乃蔣經國傳的著者、因暴露蔣家內幕、導致殺身之禍、根據美方 CIA 的調查報告(錄音有証)與蔣經國長男有直接關係、使國民黨政府與蔣家無從弁明、(江南被殺害後送往台北的暗號內容報告 CIA 持有錄音証摺)。

1979 年 12 月美麗島事件、雖被壓制住、沒有進一步惡化、但是民主化的火苗已被燃起、接著 1985 年上述二大政經事件、直接迫使蔣經國政治獨裁崩盤、不得不轉化台灣民主化路線、長年持病也是原因之一。

(4) 對外投資時代(1988—2000 年)

由舊殖民地搖身一變為對外投資國、此特異現象、只有在東亞才能發見、在經濟史上是難以想像、香港與新加坡由來即屬國際金融城市、是例外、要如何說明此特異現象、經濟學者提出二

種解釋、台灣土著經濟勢力因土地改良政策、被迫將資產轉移至海外對外投資是主因、此外日、美貿易經濟的摩擦造成通貨摩擦、導致日、美元高、ドル低(1985年9月ブラザ合意)的外壓是輔因、促使對外投資不衰反挺。對外投資的深意、即代表國民的生命與財產、經營者與技術者滯留海外、而國家負有保護與支援的義務、執政黨政權的外交關係能否勝任、將反映在選舉層面上、國民黨的限界、由經濟層面的視點來看、完全正確的顯現出來、此外對於財富利益的分配欠缺公正性、甚至與地方金牛暴力團勢力相結託、介入株式市場、黨營企業特權肥大化、在在令國民唾棄、因此國民黨的敗北是必然的結果。

#### (5) 國際信託投資時代(相當於陳水扁時代)

投資對象大至轉移到中國市場、不止是傳統製造業、IT 情報產業顯著發展、ホットマネー(短期資金)台頭、グローバル ファント流行、已進入グローバルイゼーション時代、貨幣市場與資本市場(亦即為替、証券、生命保險等金融証券機關)橫斷連結、不分國內外、進行大規模統合、合併(Cross-border mergers and acquisitions)造成世界市場寡占化(Conglomerate)現象、產業空洞化、deflation(通貨緊縮)長期化、雇用創出困難、政府財政困難深刻化、民進黨政府提不出有效對策、因此政治與經濟的推移陷入泥沼、加上傳統農村經濟衰退、土著經濟勢力不得不向海外市場擴散發展、政黨勢力的多樣化便無法避免、2004年總統的選舉、與野黨都無法單獨過半數、以經濟的角度來觀察說明就很自然容易理解了。

1996年台灣總統直接民選、中國採政、經分離、經濟上行市場資本主義、改革開放、1997年香港返還中國建構下、兩岸關係一躍成為國際注目版塊、但是要談兩岸關係還是得由1949年蔣介石侵台開始、大抵上可以分成3個階段模式、來說明其間的推移與發展。

#### (1) 分斷期(1949—1978年)

大約30年間、兩岸當事者、相互不關與、不壓制、絕對安定時期、政治經濟各自開拓、自得。1958年金門砲戰、導致美、中大使級非公式會談於ワルシャワ(ポーランド首都)、此是毛澤東共產政權成立以來的美、中接觸、由此延延數十年會談不間斷、也沒有任何公報發表、對中、台兩方面言、1958年是非常重要的轉換點。此外西歐經濟共同体(EEC)的發足、朝鮮動亂、美ドル過剩時代、世界經濟不安定、對兩岸關係不無影響、但是大抵上在美國關注把持下、兩岸以分斷的情形、相安無事。

韓戰後、美、中的對抗關係持續、ワルシャワ的會談也不間斷、以2個月一次的ペース進行、直至1971年7月美國務長官秘訪中國、1972年、ニクソン總統承認中國政權、發表公報(Press)、ワルシャワ會談才浮出水面、但是14年間(1958—1972年)、美、中到底達成那些協議、對アジア全体、尤其日本與台灣是很重要的一段空白、也是現代政治、經濟研究學者必須澄清的盲點。此時期雖名為分斷絕對安定期、實際上在1958年以後已漸入相對安定期。

#### (2) 萌芽期(1979—1997年)

1979年1月美、中國交正常化至1997、98年アジア通貨危機、大約20年間屬於此時期。美中關係正常化、反言之、兩岸關係流動化的開始、萌芽期中發生二件事、一是1979年中國經濟的改革、開放、由此促成兩岸經濟接觸的可能性、一是台灣、中國、香港同時加入APEC(1991)因為三者同時加入APEC、決定了中國經濟改革、開放的成否。

1989年六四天安門事件、草菅人命、蹂躪人權、受美方主導的世界經濟封鎖制裁、外資不得引入、國內失業、飢荒、社會問題嚴重、不行經濟改革開放、共產政權必然崩潰、為了解決內憂外患、1993年(APEC首腦會議發足)、江澤民乃出訪美總統クリントン於シアトル、以加入APEC為手段、接近美方、要求解除經濟封鎖、得以導入外資、也迫使中國不得不接受台灣同入APEC

(實際上台灣資本也是中國垂涎欲滴)、APEC 本是閣僚級經濟參議所、因台、中的加入變質為政治 Forum(集會所)角逐場、與兩岸關係不無關連。

### (3) 依存與乖離期(1998 年～)

引至目前、兩岸在經濟上相依日深、在政治上對立日益險峻、因此以依存與乖離期名之是最適當。1997 年 7 月 2 日、香港歸還中國、翌日アジア通貨危機勃發、是否歷史上的偶然、無從得知、當時香港總督 C、F、パットン氏(中國以彭定康名之)、是出名的中國厭惡者、如果香港返中期日稍延返、世人予測 C、F、パットン氏必定摧毀香港經濟貶值香港ドル再交還中國、誠如上述、是歷史上的巧合、香港無事返中、一國兩制得以順利導入、結果兩岸的關係以香港為媒介、間接的貿易與投資得以成立。但是香港的ドル與關稅制並不具自主性、乃掌握在北京手中、因此在經濟上兩岸的關係仍存在於不安定的環境下、只要政治上有任何的變化、都足以促成經濟上的變動、因此兩岸得以同時加入 WTO、就具有很大的意義。

加入 WTO 後、中國在經濟上會產生如何變化、深受注目、亦即自由化(市場開放、サービス、金融業等)的程度、以及對外如何膨脹擴展(指貿易、投資、資源確保等)、事實上、兩岸安定的貿易與雄厚資本的投資、乃是確保中國市場經濟化的前提條件、包含台灣與香港的資本以及華僑資本對中的投資約占外資的 55%(2003 年末現在的累積額)、依此數據可知、對中國外資的確保、的確提供最大的保障、當然也緩衝了兩岸關係的不確定性、台資以及華人資本源源不斷流入中國市場、因素不少、但是最主要是有利可圖、是以利益為本位、因此短期內不會有很大變動。日益本土化、民主化、台灣政治的情勢、隨日、美安保的推移、兩岸政治的接合將更形困難、中國不放棄武力侵台、近日更以反分裂國家法明文正當化、持續孤立台灣政策、只有促使台灣更堅定獨立意向。

2004 年的總統選舉、陳水扁的連任、在研究者的視野下是幸運而非必然的結果、因為勝選的一方、並不是最佳的選擇、雙方都是有缺憾的蘋果、無法透視未來全貌是雙方政策上的致命傷、也是結論的關鍵、誰上選都不能確保未來的明朗與成功。台灣的社会階層、政治經濟急速複雜化、民主主義歷史尚淺、市民社会未成熟、是無可奈何的事實、也是東アジア諸國的通病。民主、自由的信念、價值觀與成熟度有待成長、此乃 除兩岸糾隔的上方寶劍。

兩岸關係有三個平衡點、台灣內部的平衡、兩岸關係的平衡、以及美中關係的平衡、任一平衡的缺失、都足以導致兩岸生變。目前中國驅使北朝鮮牌、影響美日外交、打擊台灣、台灣國內與、野政黨正處於衝突絕頂期、在經濟上、目前中國是貿易依存階段、仰賴輸出的利潤以維持共產政權、漸次移轉成對外投資國、(目前累積額 355 億ドル、2002 年)從此企業與人材必須外移、中國通貨也必須上揚升值、共產主義政權將如何推移、是國際間政治、經濟學者焦點匯集處、以自動車產業為例、自動車產業是日本對外投資代表產業、進軍美國市場、擊潰美國三巨人(GM、フォード、Daimler Chrysler)是日本貿易黑字的源泉、但是目前中國急速擴大國內規模、漸次吞噬日本國外市場、10 年後將如何、是日本產業與政治界的隱憂、而日、台經濟利益一向是付着於日、中關係基軸上、因此往後 10 年、將是兩岸關係關鍵的 10 年。本文到此結束、謝謝。

文責 東 昌明 平成 17 年 4 月 12 日(火)雨



## 台湾主権記念会 彭明敏先生特別講演 平成十七年九月四日(日)於新橋・ヤクルトホール

今年、終戦六十年、また一九五一年、平和条約が調印されたのが九月八日ですから、この機会に我々台湾の状況を、考えることは非常に意義のあることだと思います。

終戦六十年と申しますが、一九四五年八月十五日、双方の戦闘行為が終了したことは、法的に戦争の終了を意味しません。戦争の終了は、関係国が正式に条約を締結し、戦争は終わったと宣言をするのが法的な戦争の終了を意味するわけです。ですから、日本は一九五一年九月八日までは戦争状態であったわけです。この日以前は、一切の関係国の法律、領土関係を含めて戦前と同じ。平和条約を調印した後、若しくは批准した後、初めて新しい法律関係が樹立されるということになっております。この事は国際法の基本的な原則であります。ですから、一九四五年八月十五日以後でも、マッカーサー、トルーマン大統領、アイゼンハワー大統領、イギリスのチャーチル、イーデン外相、皆幾度も台湾は、今まだ法的には日本の領土であるというふうに言明しております。

又、戦時と平時に関わらず、国と国との間に接触があった場合、声明や宣言を発表します。しかし、宣言や声明は、条約ではない。条約ではないということは、法的な拘束力はない。声明は、一種の政策声明で、こういう意図がある、こういうことをしたいと希望を述べる、それだけの話であって、法律文献ではございません。つまり、法的拘束力はございません。これも国際関係の一つの常識です。

一九四三年、カイロに於いて、いわゆるカイロ宣言が出された。その会談に於いて、連合国の主要国は戦争の目的を発表した。もしくは再確認した。その中で、戦争が終結したら、台湾は中国にあげると述べている。このカイロ宣言は一九四五年、ポツダム宣言が再確認したわけです。しかし意義は同じです。こういう声明は決して法的な拘束力を発生する文書ではなく、ただ我々はこの目標を持っている、こういうことをしたいという発表にすぎない。

ところが、戦後に於いてこの二つの声明が、台湾の法的な位置を議論する場合に、完全に鍵を握っています。ことに中国側、国民党を含めて、このカイロ宣言ポツダム宣言を見ると、だから台湾は

中国の一部であると、この様な状態がほとんど世界全体に渡っております。これは完全に、法的根拠のない政治の宣言に過ぎません。

何故、一九四三年に連合国がその会談に於いて、中国のことを言ったのか。その内幕をご存知の方も多いと思いますが、当時日本と中国はすでに交戦状態にあり、中国は敗戦に敗戦を重ねて、中国国民党は重慶に逃げ込んでいた。一方では、満州国も成立して、汪政権もある。蒋介石は日本と妥協する可能性が大きいという噂が伝わっていた。もちろん英米側としては、蒋介石に戦争を止めてもらっては困る。英米の立場から言えば、いくら負けても日本軍を牽制するために、中国が戦争を続けることを欲している。そのために、一種の賄賂として、もし戦争が終わったら台湾をあげるという声明を発表した。当時はどちらが勝つか分からない、台湾はまだ完全に日本がコントロールしている、その条件に於いて、連合国側が将来戦争に勝った場合、台湾をあげるということは、一種の意思表示、政策声明に過ぎないもので、条約ではない。法律的な権利義務関係を発生するものではない。それをもって台湾の位置を決定することは不可能です。ところが現在に至るまで、台湾人にとって重大な誤解が広まっている。

話をもどしますと、台湾の法的地位に関する唯一の文献は、一九五一年の和平条約、これが初めてはっきりと、法律的に、台湾はどういう位置にあるのかを述べた、唯一の文献なのです。一八九五年、日清戦争の結果、下関条約で台湾は日本に割譲された。それ以来台湾に関する唯一の法律文献は、一九五一年のそのサンフランシスコ条約にあるのです。ですから、台湾の法律的位置を論じる場合は、この二つが唯一の文献なのです。

では、一九五一年の和平条約で、台湾に関する条項はどう書いているのか。日本は台湾に関する一切の権利を放棄する、と言っている。これは異常な規定です。普通、戦争が終わった後、戦勝国、敗戦国の間には、どの土地をどの国に割譲すると、はっきりした明文で規定する。ところが、サンフランシスコ和平条約はそういうことを言っていない。非常に変わった言い方で「日本は台湾に関する一切の権利を放棄し、放棄した後、だれが台湾を取るのか、それは全然規定していない。こういう和平条約の規定の仕方は、私は他に例がないのではないかと思います。ただ、一国が領土を放棄し、それをだれが取得するのか全然規定しない。

しかしこれは連合国が非常に深い考慮をした結果であって、故意にこの様な規定をしたわけでは、ありません。主な原因は、当時中国の共産党と国民党の内戦が継続しており、国民党が台湾に逃げ込んでいる。ですからカイロ宣言の時も、以後も、連合国側は、台湾を中国の内戦の中に引き込むという意図は全然なかった。避けたかったのです。台湾は中国の内戦の中に巻き込まれるべきでない。そういう意図があった。だから日本は領土を放棄したけれども、誰のものになるのか、どういう法律適用をとるのか、故意に空白にしてしまった。当時のイギリス外相などがはっきり言っている。

しかし一方においては、一九一九年、第一次世界大戦の終結の後の、アメリカのウィルソン大統領の宣言において、初めて人民自決という理想的な原則を出した。これは当時非常に大きな反響を巻き起こし、台湾もその影響を受けている。台湾人が初めて台湾議会設置運動を起こした。これもウィルソンの人民自決の影響を受けているのです。人民は、自分の政府を選択する権利があるべきである。自決という意味は、色々な意味があります。先程申したように、自分はどの様な政府の下に生きるのかを決定する権利、または自分たちは国際社会において、どういう地位があるべきであるか、独立するのか、もしくはどの国に属したいのか、この国際地位を自分で決定する権利、これを含めております。例えば一九四二年の大西洋憲章には「領土の変更は統治人民の同意を得なければならない」とあります。つまり統治人民の意思が最高決定の要素なのです。これは現在の国

際政治の基本原則です。ですから一九四五年日本が、台湾の一切の権利を放棄した、その当然の解釈として、この台湾の地位の権利は、台湾住民に属すべきである、という解釈が唯一の合法的な正確な解釈だと思われます。会議の時にある代表は「台湾の将来は、台湾人民に任すべきである」と言及している。これが当時の本当の連合軍側の意図だったのです。

ところが一九五一年と申しますと、一九四五年の戦闘終結より六年が経過しています。不幸にしてこの六年間、台湾において、すでにほとんど取り返しのつかない、嘆かわしい既成事実が作り上げられてしまった。

一九四五年、日本が降服を宣言した直後、連合軍の最高司令マッカーサーは、第一号命令で、中国軍に台湾に行き、日本軍の降服を受け取れと、こういう命令を出した。ですから、連合軍の命令に基づいて国民党軍が台湾を軍事占領するという行為をとったわけです。国民党軍が連合軍を代表して、連合軍のエージェントとして台湾来た。ですから国民党軍の台湾への上陸は、一種の短時間の軍事占領なのです。ですから今でも当時国民党の軍隊司令が台北で、日本の軍隊の司令の降服文書の調印をした時の写真を見ると、全部連合軍の国旗が立っている。その中で、国民党が連合軍を代表して日本の降服を受け取った。これが真実の意義なのです。

では何故、何故六年間において、台湾に嘆かわしい状態が出現したか、そして引き続いて現在に至っているか。私の見立てでは、三つの大きな原因があると思います。

第一は、台湾人民自身の無知、あるいは幼稚な幻想、これが一つの大きな原因です。二つは、国民党政府の不法、残虐、横暴、これが第二の原因。第三の原因は、連合軍側の無能、無関心、利己主義、これも大きな原因。主にこの三つの方面から、この不幸な歴史を見ざるを得ないと思います。

第一の原因である台湾人民自身の無知とは、台湾人民の大部分は、我々の祖先が十六世紀頃中国大陸から渡ってきたことは知っている。渡ってきた我々の祖先が、非常に多く原住民と通婚したことも分かっている。しかし、中国政府、中国人民、中国文化とはどの様なものか、全く知らなかった。ただ漠然、中国は我々の祖先の土地だと、一種の憧れ、幼稚な親密感があった。ですから第二次大戦後、日本が降服した当時、台湾人は非常に喜んだ。ついに我々の祖国に帰れると。ですから中国軍が台湾に来ることを、非常に喜び、熱烈に歓迎したわけです。ところが中国人が台湾に出現した時に、台湾人は本当に驚きました。果たして地球上にこんな人類もいたのかと思いました。そこに初めて自分たちは五十年間中国と切り離されて、異なった物の見方、価値観、社会観、人生観があり、無自覚のうちに自分のアイデンティティーがあることを発見した。これはもう歴史的な悲劇でした。ですからこの無知、中国を美化する幼稚な幻想が一つの大きな原因です。

二つめと三つめは、国民党軍は連合軍を代表して台湾に来た占領軍である。ですから彼らの代表するものは連合軍であって、中国ではない。ところが、実際にはその点を、完全に混乱してしまった。国際法的には非常に明確な規則があります。占領軍は決して統治の主権を変更しない。これはもう国際法上、完全に確立した原理です。占領は、被占領地の主権を変更しません。国民党軍が台湾を占領した場合、台湾の主権に変更があるべきではなかった。国際法に於いて占領軍の出来る事は、自分の安全を保持するために必要な処置をとる、それだけなのです。ところが、国民党が台湾に進駐した翌日、この日から台湾は中華民国の領土、台湾の人民は中華民国の国民とした。これはもう、国際法を徹底的に蹂躪した行為であります。しかし、こういうことをやっても、連合軍の方は完全に黙視してしまう。口では台湾の地位は未定である、台湾は国民党の領土になっていないと言いましたが、国民党の台湾での行為を一つも止めなかった。これが私の言う連合軍の無関心、利己主義、一切台湾の事は中国に任せ、ほったらかし、こういうような態度になってしまっ

た。これが現在の台湾の現状の発生の最も基本的な理由です。

台湾の四百年の歴史を振り返ってみますと、台湾人は一度として自分の運命に発言が出来た事はありませんでした。いつも外来政権に征服されていた。ですから四百年來、台湾人は一度として自分の運命に関する決定権がなかったわけです。しかし現在、民衆運動の発展により、一種の民主体勢が出来つつあるようです。台湾人として初めて自分の将来に対して発言する自由がある。ところが直ちに一つの外来政権が台湾に脅威を与えております。ようやく我々の先輩が血を流し、汗を流して、一応民主の体勢が出来上がった。体制がようやく出来たと思ったと同時に、既にもう一つの恐るべき政権が、外から「いや台湾は我々に属すべきである」と。これが現在台湾を取り巻く国難です。

何故台湾は中国に属さなければならないのか。中共は台湾に一步も足を踏み入れたことはありません。中共は、常にカイロ宣言とポツダム宣言を利用します、しかしこれは中国大陸のみならず、台湾の教科書にさえも台湾の地位を述べる時に、この二つの宣言が出てきます。一九五一年の最も決定的な、唯一の法律文献にはほとんどふれない。これは、国民党の政策でした。我々は一九五一年と言いますが、台湾の若い人たちはほとんどこのことを知らない。知っていてもどういう意味か分からない。ですから、中共はこれを国際的に盛んに宣伝している。だから、多くの諸外国も深くは考えず、ポツダム宣言が、カイロ宣言がそう言ったから、台湾は中国に属すべきだという見方を持っている国も多いわけです。

もう一つ中国の言い方は、我々の祖先は中国から来た、このことは勿論否定できません。我々の祖先の大部分は中国から来た。一万歩譲って、我々の祖先が中国から来たからと言って、我々が中国に属さなければならないという理由は少しもない。もし、住民の祖先がどこから来たかということを経験にして、領土を決めたら、世界は大混乱に陥ると思います。アメリカ人はどこに属すべきか、ブラジル人は、アルゼンチンは、カナダは、ニュージーランドは、オーストラリアは、誰に属すべきか。こういうことは、全く意味がない。しかし中国はもっともらしくこれを言う。また不思議なことに、世界の国もこれを受け入れている。去年ニュージーランド人の学者に抗議した時に「何故君たちは中国から来たのに中国から離れたいのか」とおっしゃる。私は答えて「じゃあなぜニュージーランドはイギリスに合併しないのか、オーストラリアと合併しないのか」と言うと、彼は返事が出来なかった。マスメディアをコントロールして、世界がこのような浅薄な、意義のない宣伝を受けている。それが我々の悲哀なのです。

中国との関係において、もちろん我々自分自身、台湾の民主体制に改善の余地はございます。不安なところも多々あります。しかし、最大の脅威は、外部から、一つの国が、公に、お前の土地は、お前の好むと好まざるとにかかわらず、俺に属すべきである。そうでなければ武力をもつてもこの地を取る。そういう中国の態度は、台湾に対する一種の不定期の最後通牒です。いかにしてこれに対応するか、これが台湾の目前の問題です。

中国との関係で、我々が非常に憤りを感じるのは、アメリカ、日本を含めて、諸国は中国問題になると、一種の意味のない決まり文句を使うわけです。いくつか例を挙げます。中国の高官がアメリカに行くと、アメリカ政府は「我々は一つの中国を絶対に支持する」と。日本も同じです。では一つの中国とは何ですか。現在中国大陸には、一つの極端な独裁専制政権がある。台湾には一つの民主政権が、実質において民衆の支持を受けている。この二つをどのようにして一つの中国に出来るの

ですか。

念仏のように、中国に会えば「我々は一つの中国を支持する」と言う。どういう意味か、我々には全く分からない。私も一つの中国には賛成です。しかしその中に台湾は入っていない。それが我々の立場です。

世界は、双方に「どうして話し合いをしないのか」と言います。双方とも話し合いをする意思はあると言っている。しかしいざとなると、中国は「話をする以前に台湾は、世界に一つの中国があり、台湾は一つの中国の一部であることを承認して、それを受け入れたら話し合いの席に着く」という条件を出してくる。

台湾にとって、その条件を受け入れたら、もう何も話す必要はない。いかに一つの中国の概念が、本当の問題の解決の邪魔になっているか。二〇〇〇年、陳水扁さんが総統に当選した時、中国との硬直状況を打破するために、就任演説で、非常に重大な譲歩をしました。先程申しましたように、一つの中国、これが双方の問題の解決の邪魔になる。ですから陳水扁さんは「一つの中国という問題を、一つの議題としてお互いに話し合いの席に着いた後、この問題をいかにして解決するか、議題として、討論しよう」と提起しました。これは台湾にとっては非常に大きな譲歩です。そのために陳水扁総統は非常な批判を受け、支持者も失った。私も強烈に批判しました。しかし陳さんはこの一つの中国がそれほど阻害になるのなら、これを議題として先ずお互い話し合いの席に着いて、話を始めようと提起しました。しかしこれほど譲歩しても中国から得たものは、侮辱と拒否でした。現在も同じです。

実際、一つの中国の観念の阻害を受けて問題を解決できない。ですから、国際的に一つの中国という観念を打破しなければ、台湾問題の解決は難しいと思います。

一つの例は、よく言われるのは、現状維持をしろと。台湾でも政治家が沢山現状維持、現状維持と言ひ、一般民衆も現状維持と言ひます。では、現状維持と言ひますが、一体現状とは何なのか。誰も定義が出来ない。何が現状であるか。実際において、現状は不斷に変化しつつある。中国においては、毛沢東の文化大革命から、現在の市場経済に至るまで、どんどん変化しつつある。台湾も昔の独裁政治から、民主化と、変化しつつある。何が現状であるか。中国はミサイルを七百から八百基まで増加する。毎年増加している。これは現状の維持ですか。台湾はそれを防御する武器を買わなければならない。台湾が外国から武器を購入するのは現状の変更ですか。現状と言ひるのは、動的なものであつて、静的な性質のものではない。ですから、もう一つ我々が忘れてはならないのは、つ中国は現在、現状維持とも言ひている。彼らが現状維持と言ひるのは、まだ台湾を武力で圧倒する時期がまだ来ていないからです。現在中国は毎年国防予算が二桁の伸びをしています。実際においてはその二倍くらいになっています。目的は何か。非常に明らかです。十年、二十年後、そこまできからないかもしれませんが、中国は一旦、アメリカに牽制を与えて、アメリカが容易に介入できない武力に達した場合には、一挙に台湾を征服する。それは明らかです。その意図の下に現在現状維持と言ひている。一般の人は、台湾の人も含めて現状維持と訳も分からず言ひている。

もう一つ、我々がいつもアメリカから言われるのは、中国を刺激するな、中国を挑発するなど。だいたい台湾は中国を挑発する力も、そういう意図もありません。問題は中国から言えば、台湾が何をやっても、嫌な事は全部挑発だと言ひ。台湾が総統を直接選挙をすれば挑発だ。台湾が人民投票をすれば挑発だ。台湾が中国の脅威を受けているから、新しい武器を購入したら挑発だ。台湾の政府の高官が外国を訪問したら、これも挑発だ。私がここで講演しているのも恐らく挑発で

しょう。

ですから、われわれが無条件に降服する以外、台湾のやることは、皆挑発でしょう。これが我々の直面している問題です。

私が台湾に言いたいのは、台湾人はあれだけのテロの下で、あれだけ長期の奮闘をして、あれだけの犠牲を払って、現在のこの民主体制を樹立した。これは誇りをもっていい。しかし現在世界が知りたがっているのは、あれだけの血と涙を流して樹立したこの民主体制が、外国から暴力の脅威を受けた場合、果たして君たちは立ち上がってこの自由を守る決心があるのか。これが、現在世界が台湾に聞きたいことで、注視しています。

結局台湾の将来は、複数の重要な要素が決定的になる。一つは、中国そのもの、果たしてこの様な横暴な、二十一世紀からかけ離れた政策、武力を使い、人民の意図を問わず無理やり取ると。この政策が続けられるのか。

第二に、世界の国々がこのような政策を容認できるのか。アメリカは一九七九年に中共を容認した時、一つの法律を作りました。台湾関係法です。その法律に基づいてアメリカは、台湾の問題は平和的手段によって解決するべきで、武力による解決には反対する、台湾に対して武器を供給する。このような法律が存在しております。ですから台湾に関する限り、アメリカの政策と中国の政策は正面衝突になっているわけです。アメリカを含めての国際社会は、このような横暴な中国の政策、これを容認するのか。

第三の要素は、最も重要な台湾人本人の覚悟です。苦勞して、民主の体制を作ったことは、偉大なことです。現在は、一体この苦心惨憺して築き上げた民主体制が脅かされた場合、一体君たちはこれを守るために立ち上がって奮闘する決心があるのか。これは台湾人が考えるべき点です。現在嘆かわしいことに、台湾はあれだけの脅威を受け、中国の武力がいかに強大か知っている。ですからアメリカも心配し、台湾の現在の武器は足らないので供給してくれる。政府も予算も組んで議会に出している。しかし不幸にして台湾の一部の人々は、中国と呼応して、台湾の防備を妨げようとしている。予算を通さない。こういうような嘆かわしい状態にあるわけです。

皆さんにご理解いただきたいのは、台湾の政治はこの様に複雑なのです。ですから皆様台湾へのご関心感謝しております。

最後に、私か台湾人に再度聞きたいのは、一体我々台湾人は、台湾の主権のために、民主の為に死ぬ覚悟があるのか、これを私は聞き続けております。

「註」

本稿は9月4日東京銀座ヤクルトホールで、本会が他団体と共催した台湾主権記念会にて、彭明敏教授が講演した“サンフランシスコ平和条約と台湾”の講演録であります。当日に未参加の先生たちに講演の内容を分ち合えるため、会員誌にて抄録を公開するものです。なお、来年度も同じ趣旨で台湾主権記念会を開催する予定でございます。

## オリーブの木 —台湾主権記念会後記

王 紹英

おそらく多くの方と同様、私が物心つくときから台湾の国慶節は「輝く」双十節でした。この国慶節、すなわち国の誕生日を何の疑いをもつこともなく、私は青年期まれ過ごした。しかし、よく考えれば可笑しな話である。双十節は、かつて台湾人エリートを根こそぎ殺戮して人類史上最長な戒厳令を敷いた中華民国の建国記念日であって、台湾人と何の関係もないはずでした。また、台湾人は支那人が勇敢で多大な犠牲を払って創った中華民国になんら貢献していなかった。何で、台湾人が中華民国の建国記念日を慶祝しなければならないのでしょうか。この祖父を蹂躪し、自分たちを恐怖の淵に落とした占領政権の誕生日を祝うような台湾人は、無知、無情、凶々しい、破廉恥としか言いようがなかった。私もかつてその中の一人であったことを考えると汗顔のあまりでした。

私の卑怯は即ち台湾社会の卑怯でした。この台湾社会の卑怯と残虐な中華民国に、避けられない危険を冒し、台湾の歴史に宝石のように残る「台湾人民自救宣言」を掲げ勇敢に立ち向かったのが彭明敏教授でした。この後の経緯は周知の通り、彭教授は台湾建国闘争の歴史に超越な地位と不動の名声を得られた。私は親父から台湾人に稀に見る教授の英雄的な行動と謎に包まれた脱出を何回も聞かされた。

それから20数年、私は都内の青山大学の講堂に始めてまだ亡命中の身であった教授を見て講演を拝聴できた。私は、台湾近代歴史もっとも輝かしい伝説的な人物の姿を自分の目で確かめるのが出来て感動を強く覚えた。

話は大分横道に逸れた。台湾人がもし自分の独立記念日もしくは国慶節を祝うとしたら、サンフランシスコ平和条約に日本が調印し、台湾に関する権利を一切放棄した日1951年9月8日であるべきと、台生報の編集長・連藤根博士が提示した。その日を境に、我々の無数の祖先が血汗を流して開拓した田園、彼らの靈魂が宿っている山河が子孫の手に帰ったのである。すなわち9月8日こそ台湾人の真の国慶節であって「光輝」な双十節は台湾人にとってはただの滑稽節であるということでした。しかし、主権は台湾人の手にあっても、不肖の子孫がまだ台湾国を創っておらず台湾国と言うものはまだこの世には存在していないので、台湾国の国慶節というのは理屈に通らないのであろう。9月8日を独立すべき台湾国の主権記念日にするのが妥当であろうと思った。

9月8日の前の日曜日、9月4日に主権記念会を開催しようと腹を決めて台湾主権記念会運営委員会という臨時の組織で挑んだ。

なんと言っても最初の試みなので、どのような規模で、どういう形にすればいいかがよく分からなかった。しかし、とに角、多くの人に台湾主権問題に関心を抱ければいいのではないかと思った。今までの意識形態を転換できるか否かは別として、とにかくまず台湾主権は台湾人の手にあるという考えを持ってほしかった。

まず、多くの人、そうして安くという二つの条件をクリアしようと思った。安い、それは無料で越したことはなかろうか。多くの聴衆、それはいい講師と魅力的出し物にしなければならなかった。

財源は共鳴してくださった先生方から協賛をいただき、主催のわが会と日本台医人協会二団体から協賛金を十五万円ずつ頂戴した。さらに、駐日代表処と中央政府にも貪欲に手を伸ばし、大金を頂きました。お蔭様で財政は安心できた。

講師は、最初から彭教授をファーストチョイスと決め、岡山文章先生と台湾にいる助人・李孟修先生との連携プレーで教授の首肯を得た。カリスマ性、見識、学問、知名度、人望、講演力をどれひとつとっても彭教授は最高な人選でした。

過去の催しと違って今回の記念会は講演会と音楽会の二部組み合わせにした。過去の我々の講演会のち懇親会のパターンを顧みれば、何れも懇親会の部が頭痛の種でした。出血サービスを

しても、参加者からの不満・非難は免れないことは、皆様も身をもって感じてきたことでしょう。それなら、衆人の口腹を満足させない懇親会の代わりに魂を高揚させる音楽会に替えても悪くない選択ではないかと思った。

音楽会の主役を決めるのに最初は難航した。幸い、張伯堂先生夫人の懇意で東京台湾教会聖歌隊と李牧師のご子息・李文智さんがギャラなしで出演を快諾してくれた。李さんはまれに見る counter tenor の逸材であり、台湾もつとも瞩目すべき有望な若き声楽家である。台湾のもつとも暗黒な時代に光芒を出した人物とこれから世界に活躍してゆく希望の次代の組み合わせで台湾の歴史の変遷を暗喩した。

9月4日、574席のヤクルトホールが熱気に包まれ、参加者に埋め尽くされた。彭教授の力強い、理路明晰なお話と李さんの美しい歌声と聖歌隊のハーモニーが全員の心を打ったに違いないと確信した。

今回の記念会は果たして我々が期待した影響はあるかどうかは神のみ知るが、私はある哲人の言葉を思い出さずにいられなかった。

——「私はただゴミの島にオリーブの木を植えた。」

#### 【追記】

この準備中の数ヶ月間、不手際のところも多々あったが、先生方が大目にてみてくださって心から感謝しております。

会の財政難を抱えながら協賛金を同意してくれた日本台医人協会大山青峰先生とわが会の丘哲治先生両会長を始め理事の先生方には感激の気持ちでいっぱいです。協賛して下さった先生方、毛利忠、龍家邦、翁宗仁、林建良、岡山文章、岡山恵子、高村豪、游泰慶、元山逸功、高素妙、簡徳珍、長峰俊次、顔真賢、葉山哲夫、丘哲治、中里憲文(敬称略、名簿順)及び会計担当の毛利忠先生とご夫人、駐日代表処との折衝に一皮を抜いてくれた大山青峰先生、ならびに当日会場の案内、整理、舞台の準備、後片付けなど3Kの仕事に汗を流してくれた先生方にもこの場を借りて心から御礼を申し上げます。

また、今後台湾建国運動の翼賛の一環として、主権記念会を継続していく場合、いくつかの反省すべき問題点をクリアしなければならないと思われまます。

彭明敏教授の講演録が出来上がり次第、雑誌に発表できるよう努力いたします。

最後に、丘哲治会長が来年の台湾主権記念会運営委員会の代表幹事を務めてくれることを嬉しく思っています。丘会長は催しに長けているので、来年は大変楽しみです。

### 李登輝氏が懸念する台湾と日本の安全保障 ～日本の最大の理解者の声に耳を傾けよ!～

本文は、古森義久氏が日経新聞のホームページの Safety Japan 2005 欄に掲載した文章です。古森氏は、ぜひ本会会員にもこのコラムを見て貰いたいとの連絡がありまして、インターネットでご覧にならない会員は是非この論説を見て頂きたい。



## “民主主義の闘士”李登輝氏の切実な訴え

台湾はいま中国の強大な軍事脅威にさらされています。その台湾の安全保障は日本の安全保障とも密接につながっています。台湾や日本の安全保障の危機は民主主義の危機でもあるのです」

普通に聞けば、まあ当然だろうと、つい聞き流しになりがちな、こうした言葉も台湾の李登輝前総統の口からとなると、ぐっと真剣に受け止めてしまう。ましてその李登輝氏の言葉が流暢な日本語となると、その内容にはことさらに重みを感じてしまう。私がワシントンでの李氏の演説や談話を何度か聞いての感想の一端は、以上のような点だった。

台湾の総統を1988年から2000年まで務めた李登輝氏がこの10月、アメリカを訪問した。中国からは「台湾独立を推進する分裂主義者」とか「売国の徒」とまで攻撃される李氏は周知のように台湾の自立を強く唱えるリーダーである。台湾では国民党の独裁下にあった統治を民主主義へとみごとに切り換えるという歴史的な実績を残した。

だが中国からみれば、李氏は「一つの中国」を否定する反逆者となり、北京政府は氏の諸外国の訪問にはたとえ私人の資格であっても激しく反対してきた。京都大学出身の李氏が日本への訪問を切望し、なんとか二度ほど実現はしたものの、日本政府はそのたびに中国の激しい妨害工作を受けてぐらぐらと揺れたことも、すでに広く知られている。

しかし李氏の今回のアメリカ訪問は画期的だった。まず期間が10月11日から23日までと、ほぼ2週間という長期だった。しかも訪問先がアラスカからニューヨーク、フィラデルフィア、そして首都のワシントン、ロスアンゼルスと主要都市を網羅した。とくに首都ワシントンは中国がもっとも激しく反対してきた訪問先であり、李氏にとっても1988年の総統就任以来、初めての来訪だった。

今回の訪米の目的は「アメリカの議会や財界、学界、台湾系米人社会などの古い友人知人と再会して、友好を再確認する」と説明されていた。だが、より具体的には台湾の民主主義の確立を強調して、共産党独裁の中国とのコントラストを鮮明に描き、アメリカ側に広くアピールして連帯を求めるとするのが李氏の活動の主眼であることが明らかだった。だから訪れる先もアメリカの民主主義のゆかりの地が優先して選ばれていた。そして李氏の民主主義の強調の背後にあるのは明白に台湾の安全、さらには東アジア全域での日本やアメリカの安全保障をも含む平和と安定への深刻な懸念であるようにみえた。

李登輝氏にワシントンで会えることは私にとって特別の意味があった。私事ではあるが、私自身が個人として実際に李氏に何回も接し、その見識や人となりによってすっかり魅せられていたからだ。そこには以下のような経緯があった。

国際報道に長年、かかわってきた私は中華圏での取材や報道はわりに遅く、1997年7月の香港返還が最初だった。このとき香港に1カ月以上、滞在して多数の人に会い、多数の記事を書いた。そのなかには日本と中国との絶望的なほどの断層について説明した「日中友好という幻想」というタイトルの雑誌論文もあった。この論文を読んで筆者に関心を抱いたという李登輝氏から仲介者を通じて「台湾にきて、お話をしませんか」という呼びかけがあった。かりにも事実上の一国の現職元首からの招きである。産経新聞のインタビューということにしてもらい、ワシントンからすぐに台北に飛んだ。97年12月のことだった。

当時すでに総統在職十年近くを迎えていた李氏は私邸で会見に応じてくれた。台湾や李総統について無知だった私はこの会見で衝撃的な体験をした。まず李氏は日本の基準でも平均よりずっと流暢で格調の高い日本語を自在に話した。外国の国家元首に匹敵する最高指導者が日本語を母国語のように話すことに私は仰天した。しかも李氏は自分が日本での教育を人格形成の基盤にしたことをごく自然に告げて、日本の台湾統治はよかったとまで明言した「日本精神」などという言葉の口にして「他者との約束を守り、ウソをつかず、人間として清く正しく生きる精神のことですよ」と、淡々と語るのだった。

こんなことがあるはずがない、と耳を疑った。日本の戦前、戦中のアジアでの行動はすべて悪として現地では嫌われ、憎まれているはずではないか。日本の台湾の植民地支配がよかったなど、そんな邪悪な認識があるはずがない——と、私はまじめに思った。ところが李総統はごく真剣に日本への信頼と親近感を表明し、日本の歴史や伝統、文化などへの賞賛さえ述べるのだった。普遍的であるはずがない日本の古くからの価値観が台湾の多くの人たちにはきわめて肯定的に受け入れられた、ということなのだった。これまた、戦後の日本の伝統否定教育を受けて育った私にとっては信じられないほど意外だった。

李氏はそのうえで台湾の伝統やアイデンティティー（自己認識）の重要性について熱心に語った。台湾の価値観が民主主義という普遍の理念と一体となったことを強調し、一党独裁の中国とはあくまで異なることをも力説した。結局私のインタビューには4時間をも費やしてくれた。私はそれからちょうど1年ほどして、北京駐在となったこともあり、台湾はわりに頻りに訪れるようになり、李登輝氏にもそのたびに面会した。李氏だけでなく台湾社会全体の日本に向ける温かいまなざしを知り、私は日本にとっての台湾の貴重な価値を心から意識するようになった。

---

## 毅然として日本と台湾の立場を弁護

今回、アメリカを訪れた李氏とは同氏が首都ワシントンに着いた10月17日の夜に顔を合わせた。曾文惠夫人を含め、ごく少人数での食事会に加わる機会を得たのだった。久しぶりの再会を顔をほころばせてよろこんでくれた李氏は82歳という年齢を感じさせない情熱で台湾の安全と危機を語った。もちろん日本語だった。冒頭の「中国の強大な軍事脅威」も、そのなかの言葉だった。李氏は中国には厳しく、小泉純一郎首相のその日の靖国神社参拝への中国からの非難については「一国の政府の長が戦争で死んだ自国民の霊に弔意を捧げるのは当然であり、他国から命令を受ける必要はないでしょう」と明言した。李氏はまた「中国が日本に対し日本の首相の弔意表明のあり方についてあれこれ命令することは、おかしいです」とも語った。心強い日本の味方という姿勢だった。

アラスカ州のフランク・マカウスキー知事の招待で訪米した李氏は表面的にはアメリカ一般に対する「民主主義への共感の訴え」を主要テーマにしたようだった。アラスカからニューヨーク入りしたあと、17日朝は車でアメリカ民主主義発祥の地のフィラデルフィアに向かい、独立記念堂や「自由の鐘」などを見学した。同じ日の昼、ワシントンに着いてからも、まず国立公文書館で寄贈をして、民主主義を讃える演説をし、その後は独立宣言を起草したアメリカ第三代トーマス・ジェファークソン大統領の記念堂をも訪れた。翌18日には李氏は大手研究機関のヘリテージ財団に招かれ、民主主義促進の功を讃える表彰を受けた。そこでの演説も台湾の民主主義の広がりについてだった。19日にはアメリカの連邦議会での歓迎式に出て、台湾とアメリカとが民主主義政体同士で緊密な連帯を保っていくことへの希求を強調した。議会側は「台湾議員連盟」を中心に上下両院議員合計25人が出席し「李総統は中国からトラブルメーカーと呼ばれるが、アメリカの初代大統領のジョージ・ワシントンもイギリス植民地軍からみればトラブルメーカーだった」(デーナ・ローラバッカー下院議員)というような激励の言葉を送った。

李氏は議員たちへの挨拶の演説で「中国の軍国主義や膨張主義の危険」をも訴えたが、そこでも「台湾の民主主義」の防衛を大前提としてうたっていた。こうした民主主義づくめのアピールの圧巻が二十日のナショナルプレス・クラブでの演説だった。李氏は「台湾の民主主義への道」と題するこの演説で次のような諸点を熱っぽく説いたのだった。

1 「新時代の台湾人には中国人と異なる台湾人アイデンティティーが強まってきたが、この認識が民主主義と組み合わせられて強まっている点が重要だ」

2 「将来のいつか、台湾は完全な民主主義国家になるという目標に向かい、より着実な措置

を取る道を進むだろう」

3 「台湾はすでに事実上の独立と主権を有しているため、独立を宣言する必要はないが、その事実上の独立も民主主義の確立が前提となる」

李氏のこうした民主主義の連呼はアメリカ側に対し同氏自身を「台湾の民主主義の顔」としてみせる効果をかなり広範に残したといえよう。李氏の民主主義の強調には民主主義の全世界的な広がりを対外戦略の柱とするブッシュ政権も確実に前向きに対応を示すだろう。台湾が民主主義体制をきちんと保持する限り、中国の軍事脅威から台湾を守ろうとする姿勢を崩さないだろう。李氏側にもその期待が強いわけだ。李登輝前総統が本音としてもっとも強くアメリカ側に訴えたかったのは、やはり中国のその軍事的脅威の切迫であるように思われた。李夫妻との少人数の夕食の際も、中国の人民解放軍が台湾の首都の台北を一日で軍事制圧する作戦を練っていることや、台湾を射程内におさめた短・中距離弾道ミサイルを台湾海峡に近い福建省地域にもう合計七百基以上も配備したことが深刻な懸念の対象として指摘された。なにしろ中国は台湾側に独立への動きとみられる新展開があれば、即時に軍事力で台湾を併合すると公言しているのだ。

李氏は首都滞在中にワシントン・ポストとの会見で「台湾も将来、中国本土を直接に攻撃できる長距離弾道ミサイルの配備が欠かせなくなる」とも述べた。中国の軍事脅威への対応策である。この発言の背後にはアメリカが台湾への防衛用兵器の売却を許しているのに台湾側が野党の反対で同兵器購入分の予算百億ドルを立法院で否決されてしまった事実が暗い影を広げていた。中国からの攻撃への防衛が不十分ならば、攻撃用の兵器で抑止をしようという意図である。

いきなり聞けば、いかにも挑戦的にひびく李氏の「攻撃用ミサイル配備」発言も、中国側の軍事態勢をみれば、それなりに背景が理解できてくる。と同時に台湾の安全保障がいまどれほど現実の危機にさらされているかが実感として迫ってくる。そしてその台湾の安全保障が日本の安全保障とも密接につながっているという李登輝氏の警告も改めて、ずしりとした重みでのしかかってくるのである。

古森義久(こもり・よしひさ)氏

[現職] 産経新聞ワシントン駐在編集特別委員・論説委員。国際問題評論家・杏林大学客員教授。氏は、平成15年8月10日ホテルニューオータニにて本会がお招きして、“アメリカから見た台湾、中国、日本”を演題にし、講演して頂きました経歴の持ち主でもあります。

## Should Taiwan be recognized as an independent country?

Claire Wang(王 蕊先)

"There is only one China. Taiwan is not independent. It does not enjoy sovereignty as a nation," said US Secretary Colin Powell. Taiwanese president Chen Shui-Bian responded to this comment: "Taiwan is absolutely a sovereign, independent nation." This clear disagreement would be strange if the country in question were not Taiwan. Yet, it has been a problem for decades; China insists that Taiwan is a part of their country even though there are facts contradicting this which cannot be ignored. Because of China's position, Taiwan maintains very ambiguous relations with other countries and is rejected from international organizations. Historical facts point to the fact that Taiwan is not a part of China. Taiwan needs to be clearly recognized as an independent country; this way, it will benefit from international organizations and have good relations with other countries.

Events in Taiwan's past make it clear that it is currently not a part of China. Taiwan was a part of China for only eight years, between 1887 and 1895, which was during the Manchurian dynasty. The island was later ceded to Japan after China's loss at war. Decades afterwards at the end of World War Two, the San Francisco treaty renounced Japan's rights to the places they had occupied, including Taiwan. Then, the Treaty of Taipei, which followed the San Francisco treaty, announced that "nationals of the Republic of China shall be deemed to include all the inhabitants and former inhabitants of Taiwan." This statement cleared the confusion on the nationality of Taiwanese people for the time being by stating that those who were Taiwanese were Chinese.

The explanation may have been relevant for a few years; however, this

relevance changed after the Communist party took over China in 1949. At this time, Taiwan remained Nationalist, under the name "Republic of China" as it still is today, while China became the "People's Republic of China". Since then, China and Taiwan have been governed as separate countries. Moreover, Taiwan is currently a democracy, holding direct presidential elections. The democratic government is the only one that represents Taiwan. How are two different countries to be considered one when they have different names and opposite governments? Ignorance of Taiwan and China's past has made even politicians misinterpret Taiwan's sovereignty.

This has left Taiwan to maintain strangely ambiguous relations with other countries, as proven on Wikipedia. Japan and the United States, acknowledge, but do not recognize, that Taiwan is part of China. Additionally, the United States does not support the reunification of Taiwan with China or the independence of Taiwan. Instead, it supports both countries to settle their disputes peacefully. This has caused the United States to remain in an awkward position between the two countries. Although Taiwan does maintain good relations with a number of other countries, it still remains in unclear relations with many countries. To avoid these indefinite relations, Taiwan must be accepted by the world as independent.

Because Taiwan does not receive proper recognition as an independent country, it has been rejected from some international organizations. Taiwan has been denied membership of the United Nations each of the twelve times it has applied, since the UN points to Resolution 2758. Before the Resolution can be used as a reason for denying Taiwan membership, however, it must be given a closer look. It was issued in 1971, expelling the Republic of China and replacing their seat with the People's Republic of China. It declares that it "Decides ... to expel forthwith the representatives of Chiang Kai-Shek," otherwise known as Kuomintang, the Chinese Nationalist party. Today, however, Taiwan is not under the "representatives of Chiang Kai-Shek", but ruled by a democratic party. This government is the only one that currently represents Taiwan. Furthermore, even if Kuomintang are to be considered the country's representatives, the Republic of China and the People's Republic of China have been ruled separately since 1949, with the Communists in control of China. The Resolution also states that "the representatives of the government of the People's Republic of China are the only lawful representatives of China to the United Nations." If it is properly recognized that Taiwan is not a part of China, then this Resolution will be completely irrelevant to the denial

of Taiwan's UN membership. The statement of the Resolution is true, but if Taiwan is independent, then it has nothing to do with the fact that only the government of the People's Republic of China can represent China in the UN.

Taiwan is rejected from another important organization, the World Health Organization, because of the "one-China" policy, or lack recognized independence. China views Taiwan as a province of their country, and sees membership of the WHO as a move towards their independence, therefore not allowing Taiwan to be a member. It is problematic that Taiwan cannot benefit from the aid of the WHO to improve their public health. In 1998, an enterovirus spread throughout Asia without Taiwan's knowledge of the spreading disease. When it struck Taiwan, seventy-eight children died. More recently, last year, Severe Acute Respiratory Syndrome (SARS) broke out in Asia. In Taiwan, hundreds of people were diagnosed with the disease and more than twenty people died from it. There was no cure for the quickly spreading epidemic, yet, if Taiwan had been a member of the WHO, perhaps the country would not have been affected as badly. If Taiwan had shared and obtained information from other countries, perhaps the lives of the seventy-eight children would not have been taken away without any notice. Without being clearly recognized as an independent nation, Taiwan cannot benefit from membership of international organizations, such as the United Nations and the World Health Organization.

It is absolutely necessary that Taiwan be recognized by the world as the independent nation that it actually is. Many countries still accept that the People's Republic of China exercises control over Taiwan, otherwise known as the Republic of China. Because of this, Taiwan maintains relations with countries, which they cannot benefit much from. They are also unable to benefit from international organizations such as the United Nations and the World Health Organization. With the recognition of Taiwan's independence, the lives of the country's 23 million people will be affected, for the better.

## 尿路結石再発防止のために(食事・生活指導)

林昭棟

10年までの観察ではその30~40%が再発すると言われている。発生のリスク因子の不詳な本症では食事並びに生活指導が基本的な再発予防につながる事柄となる。

1日三度の食事を取り、適度な運動と十分な睡眠という余にも一般的なことになるが、「結石は夜作られる」の諺の如く、夕食を遅くかつアルコール類も含めて濃厚な内容のものを摂取することは、尿を酸性化し、リスク因子のうち、カルシウム(Ca)、蓚酸、尿酸などを多く尿中に排泄することになり、結石形成を促すことになる。

### (A)水分摂取

多量の水分摂取を行なって、少なくとも2,000ml/日の尿量を確保することは、結石形成に関与する尿中諸物質の濃度を下げることになり、どのタイプの尿路結石症患者にも当てはまる適切な助言である。季節や温度などの要因を考えて、特に夏場には、1日2.5~3L以上の飲水量が勧められる。3度の食事時のほか、昼間は一時間毎のコップ一杯の水を飲むことを習慣つけたり、夜間に尿濃縮をさせるべく、就寝前、夜間の飲水を勧めることも考えられる。

この摂取水分の内容であります。普通の水道水を基礎素材として番茶やほうじ茶が好ましい。紅茶や緑茶(玉露、煎茶)は蓚酸含有量が多く、過度の摂取を控えることが望ましい。牛乳もカルシウム含有量が多いため、必要限度内に止め、尿量を増やすために過剰に飲むことは慎むべきである。アルコール飲料は結石発生頻度を増やすものとされ、最終的に尿中尿酸や蓚酸の排泄を促進するからである。尿量を増やすためにビールを勧めることも避けるべきであろう。

### (B)食事内容

1>動物性蛋白質摂取量:カルシウム含有結石の増加と動物性蛋白質の摂取量の増加との間には一定の関係が見られるようで、その過剰摂取は尿pHを酸性化し、尿酸やカルシウムの尿中排泄を増加させ、クエン酸の尿中排泄を減少させる。また、尿中蓚酸の排泄も増えると言われている。これらはいずれも結石発生のリスク因子となる。

2>カルシウム摂取量:カルシウムの摂取を極端に制限することは、むしろ問題である。腸管内でのカルシウム・イオンの減少は遊離型蓚酸を増加させ、蓚酸の吸収を促進させることになる。両者のバランスの取れた摂取が望ましい。日本人の平均カルシウム摂取量は増えたとは言え、まだ欧



米のそれには及ばない。過剰の牛乳や乳製品の摂取に注意すればよいと考える。

3> 蓚酸摂取量：日常、普通に食べている食事には蓚酸含有量の特に多いものは余ない。ほうれん草、チョコレート、筍、ナッツ類などは比較的に蓚酸の含有量が多いので、これらの過剰摂取には注意を要する。食事のカルシウムとのバランスが大切なので、カルシウム吸収を抑える必要のある時は蓚酸の摂取量を低くする必要があるが生じる。

4> ナトリウム(Na)摂取量：Naの負荷や細胞外液量の増加は尿中Na排泄を増加させるとともに、Ca、尿酸、リン酸、マグネシウムの尿中排泄も増加させることはよく知られている。結石患者においても尿中Na排泄量と尿酸、リン酸、マグネシウム排泄量との正の相関関係が報告されており、結石再発予防に減塩食が勧められている。また、蓚酸ナトリウムを単独に負荷した場合に比べて、食塩を同時投与した場合の方が尿中蓚酸の排泄量の増加が大きいことを観察されている。

### (C) 勧め

成因のはっきりしない尿路結石の再発防止には日頃からの食事療法が基本となる。特定の食品の摂取を禁止するのではなく、偏食のない食事内容となるようなことが望まれる。例えばCa含有食品と蓚酸含有食品にみられるバランスのとれた食事である。カロリー制限、食塩制限、野菜を主にして肉食を減らし、蛋白質、糖質、脂肪の適度な摂取という、一般の成人病に共通した食事対策となる。

2005年8月1日 林昭棟

## 素晴らしき仲間—イタリアとサンマリノ共和国

丘 哲治

今年のゴールデンウィークに、機会があつてイタリアを訪れることになった。この旅はローマ帝国文化遺産の偉大さに圧倒され、イタリアの芸術を満喫し、感動の毎日を過ごされました。中に一番記憶に残るのはイタリアのトスカナ地方にあるサンマリノ共和国を見学した時でした。あれ!これが本当に一つの独立国ですかと最初は思わず自分の目を疑いました(失礼)。イタリアの地方都市よりも小さいこのサンマリノは1992年に国連に加盟し、日本にも領事館を置く紛れもなく立派な独立国です。

かつて、アメリカのリンカーン大統領から、サンマリノ宛に友情と共感を示す手紙が送られ、その中、次の言葉が記されていました「貴国は小国ですが、歴史上、最も尊敬すべき国家の一つです」とサンマリノを称えた。サンマリノは世界で3番目の小さい国で(ちなみに1番小さい国はバチカン市国、2番目はモナコ王国)、全人口は約27,000人の内陸国で、国土は大部分が丘陵地であり、アドリア海沿岸から直線距離で約10kmがあります。周りをイタリアに囲まれており、言わば陸上の孤島となっています、日本に例えれば、日本の中に世田谷という国が存在しているようなものです。主な産業は農業、林業、酪農業と観光業などがありますが、規模が小さく、国も独自に資源をもたず、いろんな面をイタリアに頼らざるを得ません。例えば電力の供給や交通(空港がない)などがイタリアに依存していて、その上公用語はイタリア語であります。しかし、サンマリノは今でも独立、民主、そして中立を守っていますが、古来の伝統と文化に忠実で守り続けながら、時代の要請に敏感に応えることになっているのです。

一方、サンマリノを四方八方から囲むイタリアは、世界遺産の70%以上を持つ大国で、古代と中世の文明は言うまでもなく、現代においても先進国G7の一員であります。イタリアの前身である古代ローマ帝国は環地中海地域を長年支配していつて、よその国から物質を略奪し、他国の人民を奴隷として自国に連れ帰って過酷な労働をさせた悪事も歴史に残されています。文明がある一方には、こういった暗黒の一面も合わせて持ちました。しかし、現代のイタリアには、自国の領土のほぼ真ん中にあるサンマリノという国が存在していても、強引にサンマリノを併合しようとはしません。むしろイタリアがサンマリノに便宜を図って、高等教育の施設と教師や医療施設やテレビ放送など、いろんなサービスをサンマリノに提供しています。さすがに文明がずっと進化している大国だなと感銘を受けました。かのポンペイ遺跡の神殿の柱にギリシャ文字が刻まれていて、他にもギリシャ文化の跡が随所に見られます。しかしイタリア人にとってはなんら違和感を覚えませんことでした。イタリアの偉大さは、ローマの文化を受け継ぎながら異文化を受け入れることにあるでしょう。

古代四大文明の一角を占める中国の近代文明はどういうものかと言いますと、“悲惨”の一言に尽きるでしょう、とつても文明が進化しているには言えません。文化大革命時代に古代文明のいいところを凄まじく破壊しました。こうした自国の文化を否定する国は世界中にそんなにはないはず。政治的な文明の進化はもっと遅れをとっていて未だに昔のまま、独裁政治が相変わらず続いている法治社会でもないし、民主的な社会にもなっていません。最近、同文同種や北京語を

喋る者はみんなが中国人と叫んで、台湾を武力で併合しようとしている。しかし冷静に考えて見ましたら、200年前アメリカが独立して以来、英語は公用語になっています。アメリカ人はアイルランド系やドイツ系やラテン系などの血を流れていても、国民がお互いに各自のオリジナルを尊重しながら、みんながアメリカのアイデンティティを持ってアメリカを世界の唯一の超大国までに創りあげてきました。他方、ブラジルやアルゼンチンなど南米諸国の方はインディアン系やスペイン系やポルトガル系やアフリカ系の血を流れていて、イベリア半島の言葉を使っています。オーストラリアにいたっても英語は公用語、国はヨーロッパから移民してきた人から成り立っています。ゲルマン民族はいくつかの国に分かれて、しかし今でもみんながドイツ語を共用していて混乱は起きていません、アラブ民族にも同じことが言えます。

中国の文明が進化しているかどうかを別にして、前述のように近代世界の流れを見ますと、国と民族の違うところがはっきりしています。同じ民族だから統一すべきという主張は大間違いであろう、しかも台湾にいる人民は一部の大陸出身者を除き、台湾と中国は同じ民族と言えるかどうかまだ解明していませんところが大いにある。ですから、60年以上も社会制度やアイデンティティが違う台湾と中国の二つの現存している国を一方的に統一すべきだと主張しますと紛争することに成りかねません。台湾の国民の意識を無視し、無理やり統一を主張する状況を造り出す原因の根底は、中国の中華思想にあると思います。

何時から、中国はイタリアのように文明が進化して、その中華思想の悪い部分を過去のものとし、台湾と中国がサンマリノとイタリアのような仲が良く素晴らしい隣国になることを私は夢を見て望んでいる次第です。せめて、ミサイルで相手を恫喝することは止めて頂きたいのです。

## 日本台湾医師連合の歩み

2002年2月11日

- 東京学士会館にて日本台湾連合の設立準備会が発足し、第一回役員会を開催

定款の草案、ホームページの開設、役員人事

2002年3月10日

- 第2回役員会創立大会の準備

WHO 特別委員会を設立

2002年3月21日

- ホテルニューオータニにて創立大会および記念パーティを開催
- 重光茂栄先生が初代会長に就任(副会長:岡山文章、毛利 忠、常務理事:

丘 哲治 簡野国彦、武田守祿、長峰俊次)

2002年4月4日

- 台湾の WHO 日本訪問団と懇談会を開催

2002年4月29日

- 第3回役員会 WHO 研究班を発足
- ホームページに台湾の WHO 加盟促進運動 on line petition を始める
- 小泉総理大臣、川口外務大臣および坂口厚生労働大臣に台湾の WHO 加盟協力の要望書を発送

2002年7月7日

- 第4回役員会 小沢一郎自由党党首の講演会準備会を設立(委員長:重光会長)

2002年8月7日

- 羅福全代表を懇談、当会の志、主旨、立場を明確に述べる

2002年8月12日

- 重光会長が第2回海外医療専門士帰国懇談会に出席

2002年9月29日

- 第5回役員会 岡山文章副会長が事務長代行に就任

2002年10月27日

- NATMA(北米台湾人医師協会)台湾 WHO 加盟促進委員会および FAPA と懇談会を在日台湾同郷会と共催

2002年11月10日

- 第6回役員会 小沢一郎先生講演会の準備作業の最終確認

2002年12月1日

- 立川市市長および国際交流フェスタ実行委員長あてに抗議文を送る

(立川市市女性総合センターに予定された金美齡氏の講演会が、立川市在住の支那人団体の圧力によって中止された。この事件は日本の言論自由を侵すのみならず、日本の国益を犯しと日本国の尊厳を踏みにじるであると当会が判断し、抗議した。)

2002年12月14日

- ホテルニューオータニにて“小沢一郎が考える21世紀の日本とアジア”の演題で小沢一郎衆議員講演会を開催

2003年1月12日

- 第7回役員会 会誌“さと医も便り”の発行を議決し、直ちに第1号の2003年1月号を発刊しました
- 次期役員改選のため、総会準備委員会および選挙管理委員会を設立

2003年2月16日

- 第8回役員会 第二期の役員が郵送投票にて承認決定される

2003年2月23日

- 台湾のWHO加盟にアフリカの国々の協力が得られるようコンゴ人医師 Dr. Milanga と懇談

2003年3月9日

- 臨時役員会開催 会長、副会長、常務理事を選出(会長:岡山文章、副会長:毛利 忠、丘 哲治、常務理事:武田守祿、長峰俊次、中山博雄、東 昌明)

2003年3月18日

- 水野賢一先生の励ます会に出席

2003年3月21日

- 東京ホテル雅叙園にて日本台湾医師連合第1回定時総会および元駐タイ大使岡崎久彦先生の講演会を開催(演題:最近の国際状況と日本外交—台湾の戦略的意義)

2003年3月24日

- 長野県知事田中康夫の台湾訪問を激励

(長野県日中友好団体井出正一会長が田中知事の台湾訪問を中止するよう圧力をかけたことについて、知事が理不尽な圧力に屈せずに台湾を訪問するよう申し入れた。)

2003年4月22日

- WHO 事務長 Dr. Brundtland に台湾の WHO 加盟協力の手紙を送る運動を始める

2003年5月11日

- 台湾の SARS 防衛に協力するため、当会の呼びかけで台湾 SARS 支援協議会が発足した。(協議会メンバー:高雄医学大学日本校友会、中国医学大学留日校友会、中山医学大学留日校友会、日本台医人協会、日本台湾医師連合)

協議会の募金活動の結果、台湾医療機関にアイソレーションガウン、ゴーグルおよび負圧式カプセルタンカを贈呈

2003年6月29日

- 2003年第1回役員会
- 河元康夫先生が当会代表として WHO 台湾 CAMP に出席
- 以下の研究班を設立:NPO 法人、パンフレット作成、危機処理、選挙規則、学術

2003年8月10日

- 負圧式カプセルタンカの贈呈式および古森義久先生講演会をホテルニューオータニにて開催、タンカは駐日代表羅福全に引き渡す

講演会演題:アメリカから見た台湾、中国、日本

2003年9月14日

- 学士会館にて黄焜璋院長講演会(演題:台湾 SARS の治療経験—衛生署台北医院の成果を踏まえて)を開催

2003年9月28日

- 2003年第2回役員会

2003年10月18日

- 池袋メトロポリタンにて台湾医師会一行と懇談交流

2003年12月23日

- 渋谷エクセルホテル東急にて三会共同忘年会および台湾総統呉釗燮副秘書長講演会を日本台医人協会、怡友会と共催(演題:制定新憲法—台湾人の願景)

2004年1月18日

- 第3回役員会開催

黄院長 SARS 講演録に日本語訳を公開することを決定

2004年2月1日



- ホテルセンチュリーハイアットにて若林正文教授の講演会を開催
- 演題:台湾ナショナリズムと日本、中国、アメリカ

2004年2月22日

- 第4回役員会

3月28日の総会および阿部晋三自民党幹事長講演会の準備について討議

2004年3月28日

- ホテルオークラにて第2回定時総会および安倍晋三自民党幹事長の特別講演会を開催
- 演題:アジアにおける日本と台湾、そして地域全体の国際状況

2004年6月13日

- ホテルニューオオタニにて台湾駐日代表羅福全博士の帰国パーティを共催
- (共催者:怡友会、英才会、高雄医学大学日本校友会、中山医学大学日本校友会、日本台医人協会、日本台医人婦人会、日本台湾婦人会、日本台湾医師連合)

2004年6月13日

- 参議院全国比例区自民党公認候補者 関はじめ氏に支持表明

2004年7月18日

- 新高輪プリンスホテルにて台湾新駐日代表許世楷先生の歓迎会を共催

2004年9月23日

- 日本台湾医師連合役員選挙規定草案を審議
- 台湾憲法制定運動に参加することを表明

2004年10月25日

- ホテルオークラ曙にて中西輝政教授の講演会を開催
- 演題： 国家としての選択—日本は本当に変わるのか

2004年11月4日

- 新潟県中越地震震災の救済募金を発動
- 11月18日NHK新潟県中越地震災害募金へ¥1,000,000円の義捐金を寄付

2004年12月23日

- 渋谷エクセルホテル東急にて怡友会、日本台医人協会と佐藤守将軍(元南西航空混合団司令空将)の講演会および忘年会を共催
- 演題:中国空軍は台湾海峡上空の航空優勢を獲得できない

2005年1月16日

- 新年会および日本台湾医師連合のあり方について検討会を開催

2005年2月20日

- ホテル センチュリーハイアット東京にて、呉念真先生(映画監督)を招いて講演会を開催しました。

演題:生きて行く台湾——人々の暮らしの観点から(日本統治時代～現在)

2005年3月27日

- 05年第1回理事会理事会が開催、会長、副会長、常務理事を選出(顧問7名  
会長:丘哲治、副会長:頌彦真賢と王紹英他常務理事4名、理事15名 監事3名)

- ホテル オークラにて平成17年定時総会を開催いたしました。

- ホテル オークラ平安の間にて櫻井よしこ氏特別講演会を開催

演題:21世紀における台湾と日本の関係について

2005年4月6日

- 台湾建国烈士鄭南榕先生を偲ぶ集いを日台交流教育会、日本李登輝友の会、台湾研究フォーラムが主催し、日本台湾医師連合本会が共催しました。

台北駐日経済文化代表処代表許世楷先生と元『台湾青年』編集長宗像隆幸先生両先生が講師を務める

2005年4月10日

- 新旧役員協議会は日台親善サロンーにおいて開催されまし、新旧役員の引継ぎが行われました。

2005年4月12日

- 台湾行政院僑務委員会の要請により、日本台湾医師連合のホームページは、僑務委員会のホームページにリンクしました。

2005年6月8日

- 第7号さと医もたより発行

2005年7月10日

- 05年第2回理事会が新宿区四谷ルノアールにて開催しました

2005年7月24日

- ホテルオークラ・オークルームにて小田滋先生(ユネスコ海洋委員会委員、国際司法裁判所裁判官、日本学士院会員、日本国際法協会会長、瑞宝大綬章受賞)特別講演会を開催  
演題:私にとっての台湾

2005年7月31日

- 「台湾は日本の生命線」講演会は神奈川県にて開催、日本李登輝友の会が主催し、日本台湾医師連合本会が後援しました。
- 演題:

2005年8月31日

- 台湾語のローマ字発音統合問題についての提言の共同声明文に署名

2005年9月4日

- 1951年9月8日、日本がサンフランシスコ平和条約に署名し、台湾の主権を放棄した。台湾主権が、再び台湾人自らの手に帰るべきものとなったことを記念し、東京都新橋ヤクルトホールにて台湾主権記念会を開催した。
- 第一部 講演会 台湾総統府資政:彭明敏教授  
演題:サンフランシスコ平和条約と台湾(日本語で)
- 第二部 音楽会 李文智 tenor & countertenor/東京台湾教会聖歌隊
- (主催団体)日本台湾医師連合、日本台医人協会、怡友会、在日台湾同郷会、日本李登輝友の会
- (共催団体)在日台湾婦女会、日本台湾言語文化協会、中華民国留日東京同学会(TS A)、東京台湾教会(後援)台北駐日経済文化代表処

## 05年第2回日本台湾医師連合理事会議事録

日時:平成17年7月10日(日) Pm:4:30

場所:ルノアール四谷店 新宿区四谷1-3-22

司会:中山博雄先生

記録:河田啓暉先生

出席理幹事

東昌明 岡山文章 丘哲治 大山青峰 王紹英 河元康夫 河田啓暉  
蕭惻惻 高村豪 中山博雄 中里憲文 長峰俊次 布施政庭 劉文玲  
顧問  
重光茂栄 玉井輝章

#### 1、開会

#### 2.出席者の確認

3、会長挨拶 本日は、日本台湾医師連合顧問重光茂栄と玉井輝章両先生にも出席して頂き、厚く御礼を申し上げます。

#### 4、諸報告

1 現会員数 151名

2 “日本文化チャンネル桜”の件について

日本で、専門的に台湾のことを放送されている番組は数少ない。その中、“日本文化チャンネル桜”は、CSデジタル放送「スカイパーフェクトTV」のひとつのチャンネルとして放送される番組で、台湾の文化、政治や企業活動をよく取り上げて紹介している。この貴重な番組が存続できるよう、多数の会員の申込み、ご加入を期待している。

3、民進党主席蘇貞昌先生訪日の件について

4、僑務委員会からの依頼する件について

本会のホームページが台湾政府の僑務委員会のホームページにリンクすることが、常任理事の先生たちの承認で受託しました。

5、王貞治氏が台湾政府の無任所大使に選任されました。その就任式の出席要請の件について

6、台湾産果物販売の件について

最近台湾青菓社が美味しい台湾産農産物を日本で拡販することに力を入れていました。台湾を応援することの一環として、本会が代理店の三佳商事に台湾産マンゴー、ライチやパパヤ等を本会会員に販売することを委託しました。なお、売上げの一部は本会へ寄付することとなります。

7、在宅採血キット(DEMECAL)を会員たちに紹介するかどうかの件について

キットの有効性や有益性に疑問点があり、会員への紹介は控えさせていただきます。

8、中国語医療ネットワークの件について

多くの在日の中国人は、病気に罹る時、言葉の障害で満足な医療が受けられないから、練馬区のある公務員が本会の協力を要請しました。これについて理事たちがその必要性和問題点について、多くの意見や考えが述べられました。結論は、本件は本会の目的に相違する恐れがありますので、保留となります。

9、各理事報告

会計報告：毛利忠先生

5、議長の選出 本会定款草案第27条の規定により会長が議長

## 6、議題

### 1 7月24日、小田滋先生講演会について

受付、会計、会場係り、司会者等の役割分担やホテルの準備や申込み状況などを検討しました。

### 2 9月4日台湾主権記念日について

1951年9月8日に、日本がサンフランシスコ平和条約に調印し、台湾の主権を放棄して、連合軍へ返上しました。その日を境に台湾の主権は台湾へと戻りました。これに因んで、9月8日の日を台湾主権記念日とし、記念会を9月4日にて東京銀座ヤクルトホールにおいて、本会が音頭を取り、他団体と共催する「台湾主権記念会」は9月4日に開催します。当日会場総責任者は、この記念会の立案者である本会の副会長王紹英先生です

### 3 会員誌“さと医も便り”の編集長について

清水栄会員が受託・就任されました。編集委員については、各理事が兼任することとなりました。

### 4 台湾政府の僑務委員会が本会に新役員名簿の提出を要請した件について

僑務委員会に新役員名簿を提供することは、本会の一貫した理念に抵触することとなり、名簿を提出することをお断り致しました。しかし、本会が台湾を支持する立場は変わることがありません。

### 5 その他及び自由討論

講演会のお知らせに連絡網を開発することについて検討しました  
台医会音楽会のプログラムに広告を出すことについて検討しました

## 7、閉会

## 編後語

清水 栄

本会誌は2003年1月に創刊してから、すでに3年近くが経ち、数えて今回は8号目となります。これまでは頌彦真賢氏が編集の労を取って下さいましたが、本年の4月から頌彦氏が本会の副会長に栄転し、そのあとにわたくし清水栄が続けて本誌を編集することとなります。筆不精で、まったく文才のないわたくしが会誌の編集者になるとは夢にも思ってもみませんでした。パソコンは多少いじっているようでしょうから、マイクロソフトワードに文を並べることくらいはできるだろうと選ばれたようでしたが、ともあれ、勉強をしながら頑張りますので、皆様どうぞよろしくご指導の程お願い申し上げます。また、頌彦先生、3年間に大変お疲れ様でした。

さる10月に、李登輝前大統領がアメリカを訪問し、大活躍をしたことは、すでに皆様をご存じで、古森義久氏の日経BP(本誌掲載文)及び産経新聞での記事でもその大概が紹介されましたが、古森氏の記事(SankeiWeb)によりますと、李前大統領は「今回の訪米では首都ワシントンを含めた各主要都市での演説などで台湾の民主主義と中国の一方独裁を対比させて、台湾の自立を説くという訴えを繰り返し、台湾の「顔」としての存在感を強く印象づけた」また、中国を奴隷国家と評し「国家が労働者を奴隷扱いし、低賃金の労働をさせることで外国資本を引きつけている」と述べたり、台湾の民主主義を強調する一方「中国は国内で人権を抑圧し、周辺に対して脅威となっている点で冷戦時代のソ連と変わらない」と非難したり「中国の軍国主義や膨張主義の危険」を訴え、「台湾人の自己認識の高まり」や「新しい台湾人の時代」を民主主義とからめて力説し「台湾の呼称を現在の「中華民国」から将来は「台湾共和国」とする必要」を説いたりしました。まさに「台湾民主化の父」といわれることだけあり、82歳のご高齢になられましても、そのパワーが衰えていません。

それに比べまして、陳水扁大統領は確かにこの頃、今ひとつ元気がないようです。外交面、つい最近のセネガルとの断交のように、中国の外交攻勢によって、国交国が減りつつあります。台湾の総統としての立場が難しく、もし自党の主張を強く打ち出そうとしますと、あの横暴な大国は勿論、自国民の揺らいでいる「現状維持」の心、更に、頼りにしている大国にまでも相手をしなければいけません。李前総統も在任中、今のように歯切れよく強く主張はできませんでした。内政面、少数与党で、提出した法案を通してもらえず、また、元総統府副秘書長陳哲男氏の高雄高速交通システム建設に絡む公金横領疑惑のように味方からも足を引っ張られています。立場は確かに非常に辛く、難しいです。ここは我慢して、踏ん張って、良い智恵を搾り出していきたいところです。難しい所ですが、しかし、台湾の民主化、本土化はすでに1つの歴史の潮流として動き出している以上、多少上下に揺れはしますが、人々の思惑を超えまして、決して後戻りはしないと信じております。

今8号誌には彭明敏・台湾総統府資政(顧問)及び名ジャーナリスト古森義久の大変重みのある講演録とコラム論文、相変わらずの本誌のレギュラー論客丘、東、王3氏の鋭い論評と歴史学者顔負けの論文以外に、特筆すべきのは王紹英氏の愛娘の王芯先嬢の論文であります。短い論文ではありますが、台湾のことに関心を持って、よく勉強をされています。すばらしいことです。まさにこの父親にこの娘ありの感じですよ。

林氏の尿路結石再発防止文は、過去に2度も尿管結石の発作に見舞われた編者にとっては、大変参考になりました。あの半端でない疼痛には3度目と味わいたくはありません。